

# 2014年度鳴門市人権地域フォーラム

## テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2014年8月8日(金)13:30～16:30

■ところ 鳴門うずしお会館

コーディネーター A(藍住町立藍住中学校教諭)

パネリスト B(鳥取県倉吉市高城地区同和教育推進協議会会長)

C(香川県小豆郡土庄町立土庄中学校教諭)

D(人権を語り合う中学生交流集会運営委員代表)

### 《司会者》

それでは、本日の人権地域フォーラムにお招きしました講師の方々をご紹介します。恐れ入りますが、講師の皆様は、お名前をお読みいたしますので、順次壇上の席へご移動くださいますようお願いいたします。

初めに、本日のフォーラムのコーディネーターを務めていただきます、藍住中学校教諭 Aさんです。(会場の拍手に迎えられながら、ゆっくりと壇上へ移動し席に着く)続きまして、パネリストの方々をご紹介します。パネリストは紹介されるたびに、拍手の中を落ち着いた様子で壇上に上がり、それぞれの席に着く)鳥取県倉吉市高城地区同和教育推進協議会会長 Bさんです。香川県土庄町立土庄中学校教諭 Cさんです。「人権を語り合う中学生交流集会」運営委員会代表 Dさんです。

本日は、以上4名の講師の皆様と共に、『ひとつと』から『わがこと』へ～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～というテーマのもとにフォーラムを進めていただきます。なお、本日、『テレビ鳴門』の撮影が行われています。パネリストの方々の語りと、本日のフォーラムの1部を後日放映いたしますが、会場の皆様との意見交換につきましては撮影いたしませんので、ご了承くださいますようお願いいたします。それではA先生、以後の進行につきましては、よろしく願いたします。

### 《コーディネーター A》

(元気よく)みなさん、こんにちは。台風の影響が非常に心配な中、たくさんの方がこの会場に集まってくれました。昨日、私の勤務しています藍住中学校は、私が学年主任を務める1年生の学年登校日でした。第1学年、221名の子どもたちに、この3月に藍住中学校を卒業していった7名の高校生に、中学時代に取り組んだ「語り合いの人権学習」のこと、高校で必死に頑張っていること等、心の内にある思いや願いを語ってもらおうという、「卒業生に学ぶ人権学習」というテーマで学年全体での人権学習がありました。

(しみじみと)それぞれの高校生には、中学時代に揺れながら、必死に人間関係をつくっていった切ない思いがあります。その高校生たちは、「人権を語り合う中学生交流集会」など、多くの人々とのつながりの中で、自らを変容させていきました。豊かな人間関係をつくっていく力を自らの生活の中で、精一杯築いていった歴史があります。そんな思いが次から次へと語られていきました。

(力強く)若者たちの言葉の力、その心の内にあることを生き生きと表現できる。安心して表現できる。そういう関係の中で、子どもたちは、私たちは、心の内にあった卑屈なものがスッと取り除かれていって、生きる力が湧いていくんだと思います。

人権学習のよろこびというのは、自分の内にあるものを見つめ、それを表現し、そのことを問い、様々な思いを返してもらう。そしてまた、自分も返す。自分に何ができるかということ伝え、多くの人の思いに触れ、深く自分を見つめていく作業の中で、一人一人の自尊感情というのは高まっていくんだと思います。

人権啓発というのは、人権教育というのは、(ゆっくりと力強く、魂を込めて)よろこびにならないとなかなか継続しません。誰かのため、他人のためではなくて、自らが解放されていく。自分が好きになる。「昨日の自分より今日の自分が好き」という実感の持てる日常を作っていく。そんな学び合いが、私たちの中に広がっていく。そんなこれからの時間になればと思います。

(じっくりと)3人のパネリストの方から、この後、思いを語っていただきます。その実践を報告していただきます。そこには人と人とのつながりがあります。自分自身がどのように解放されていったのか。その必死の生き方があります。生きざまがあります。それを自らに問いかけながら、「自分に何ができるか」ということを、「ひとごと」ではなく「自分の問題」として、深く自分を見つめていく、そんな時間になればと思います。

最初に、この10年来、徳島県の中学生、高校生とつながっていただき、その中で様々な思いを発信して頂いています、鳥取県倉吉市のBさんから、Bさん自身のPTA活動から始まった同和教育の営み、その中でつながってきたたくさんの人たちとの関係性。そして、自らが解放されていったその思いを語っていただきます。「私ならできること、私だからできること…」自分を通し、自分の生き方を通し、たくさんの人と豊かな人間関係をつくっていった、Bさんの実践です。では、Bさん、よろしくお願いします。拍手をお願いします。(会場から拍手)

## 《パネリスト B》

### はじめに

(立ち上がり、ゆっくりと会場を見渡しながら)鳥取から来ましたBです。私はこういう場であまり原稿を使ってお話しすることはないのですが、今日は限られた時間にお伝えしたいことがたくさんあり、少しでも多くのことをきちんとお話ししたく、原稿を読むという形でお話を進めさせてください。座って失礼します。

(一言一言に心を込め、ゆっくり丁寧に語り始める)2005年に初めて参加して今年で10年目。毎年ここに参加させていただきながら、いろんな出会いをいっぱい作ってくることができました。隣のCさんもDさんもここで出逢った仲間です。今日は、同和教育との関わりが生活の一部になり、26年ずっと同和教育の活動と共に生きて来た「私」を伝えたいと思います。

### 子どもの頃からの私

私は、今ではこうして人の前からでも自分の思いを語れるようになりました。子どもの頃から大人になるまで、以前の私は、いつも人の反応や言葉に左右され、一歩引いたところで周りの人に合わせて自分の居場所を守っていました。子どもの頃、人から頼られ、好かれている幼馴染の姿をうらやましいと思いつつも、そんな思いは胸の中にしまい込み、そんなこと考えていないよという態度で遊んでいました。

真面目は人一倍だったから、「怖い」「面白くない」そんな印象を持たれていた私でした。人付き合いのブレッシャーから、小学校6年生から円形脱毛症になったり、どもりになったりしました。そんな自分が少しずつ変わってこられたのは、「本当に他人の言うような自分だろうか」と自分を振り返り続けたことと、どうしても人と関わらざるを得ない部活に入ったり、係の仕事をしながら人に慣れるようにしてきたことが大きかったと思います。そして、信じてくれた少数の友だちのお蔭でした。

## PTAで同和教育との出会い

PTAで、たまたま入った委員会で同和教育と出会い、よくわからないうちに1年を終え、何年かの空白の時間を過ごした後、企画運営の立場で同和教育と関わるようになってずっと今に続いています。

同和教育との2度目の出会いで、その時にいっしょに関わってきた人たちから共通して感じられたのは、「人としての大きさ。温かさ。熱」でした。この人たちはどうしてこんなにすごいんだろう。輝いているんだろう。不思議でたまらなかったけれど一緒にいて心地よく、その語られることにいっぱい学びがあり気づきがありました。そんな仲間との2年間で、私に「同和教育は、立場や年齢に関係なく、一人の人間同士として思ったことをありのままに語り合える場であること」を教え気づかせてくれました。

## 人権教育との関わりで変わった私 「わかることは動くこと」

現地研修会やいろいろな研修会、講座など、参加できるものにはなるべく参加し、生の声を聴き、直に思いに触れ、何度も参加するうちに顔見知りになった人たちと話すようになり、たくさんすることに気づくことができました。

現地研修会に何度も参加しながら、自分たちの村や地域をよくするために、本気で話し合い行動する被差別部落に暮らす人々の姿に、自分の村を振り返り、周りを振り返り、そのつながりをうらやましいと思ったものです。

(力強く)繰り返しの出会いの中で、部落差別の解放に向けて自分の存在をかけて頑張っている人、頑張れない人と、様々な被差別部落内の現状も見ようになり、部落差別は、そこに住む人々の問題ではなく、周りに暮らす私たち部落外の間人が、自分の周りの言葉や意識に惑わされることなく、周りのせいにするのではなく、一人を見て村全体だと捉えるのでもなく、一人一人の個人を個人として受け止め、考えていかなければ差別解消はない。そう考えるようになり、様々な学びと出会いによってそのことに気づいた自分から、部落外の人々にそのことを語って言って、一人からでも共感してくれる仲間を増やしていきたい、増やしていかなければと思ったところから、自分の問題として同和教育と関わるようになりました。

本気で関わるようになったら、被差別部落の人たちからも部落外の人たちからも、不思議な存在。異質な存在。そう見られることが多くなり、なぜ、私が異質に見られてしまうのかを問いかけ、振り返ってもらうことを活動の中心に置いてきました。

その時その時を精一杯本気で向き合うことで、本当に毎日が駆け足で過ぎて行きます。でも、それは心地よい忙しさであり、苦しさです。一つ一つの出会いがそれぞれ宝物となって私の中に、たまってきています。みんなにおすそ分けをしていくことで、更に宝物が増えていきます。

## 「でも…」と「…けど」で止まってしまう中で、動く体験と語る体験のすすめ(ワークショップ)

共に学び、語り、問いかけ続けても、「それはわかるけど…」「すごいなあ、でも、私には…」そこで止まってしまう多くの人と出会い、行動へ結びつくことの難しさをつくづく感じていた頃に出会ったワークショップの体験。これだと思いました。私たちは、多くを学び知識はかなりつけてきました。けれど、それを言葉にしたり行動に移す訓練が少ないことに気づき、確かな学びとともに、気軽に語り合うこと学び合うことを通して動ける自分育てをしていかなければと痛感しました。その思いから、様々な場でコミュニケーションを中心としたワークショップの研修会をさせてもらってきました。

参加者から、「自分を振り返る場になった。」「一緒に活動した人といっぱい話ができてよかった。」「いろいろな気づきがあった。」そんな声も聞かれ、「研修後に町の他の活動の参加も増えた。」「他の会の時にも参加してもらえるようになった。」そんな主催者の感想ももらえ、実際に語ること、動くこと、体で感じるこ

との大切さを実感しました。

### 県内外の小学生、中学生との出会いでもらった宝物

仲間になった地元の同和教育に本気で取り組む多くの先生たちから頼まれて、小学校5年生6年生の同和教育の学習から、PTA、地域の研修会と、ワークショップをしたり同和教育を続けてきた思いや実践を何度も話に行かせてもらいました。

(温かいまなざしで会場の中学生高校生を見渡しながら)小学校6年生の子どもさんと一緒に学習をして、数年後、中学生になった男の子から、町のスーパーで「Bさんだったから出て来られるのを待っていました」と声をかけられ感動したことや、話をしたことを卒業文集の表紙の題につけてもらったり、そんなしっかりと受け止め考えてくれる姿にいっぱいの元気と可能性をもらい、PTA研修においても、現役の頃共にやっていた保護者の中で、「卒業後もずっと同和教育と関わり続けています」そう言いながら部長として頑張ったり、PTA役員として頑張っているかつての仲間の姿に、伝えることへの勇気と元気と安心をもらい、行動することが楽しみになりました。

A先生と出会ってから、先生の語られる子どもたちと出会ってみたいと思うようになり、今は統合にならなくなったけれど、京都の弥栄中学校や、徳島の吉野川市にあった美郷中学校には何度も行かせてもらい、一緒に学び、つながりを持ち続けてきました。京都では、中学生だけではなく、その地域に暮らすたくさんの人々とも絆を結ぶことができ、いつでも会いたい、語りたいと思える仲間になりました。

中学生たちの、一生懸命に、時には涙でくしゃくしゃになりながら、時には体の震えを懸命に我慢しながら辛い体験を語りきる。そんな姿にたくさん出会い、いつしか、「私もこの中学生たちに負けてはいられない。この子らと本気で語り合える、本気でつながりあえる、そんな自分になりたい」と思え、出会った度に何枚もの感想文を送り、個人的な手紙のやり取りもしてきました。

次の2人の、ここ徳島の中学生の書かれた感想がこの人権フォーラムの意味を語ってくれていると実感し、紹介させていただきます。

### Mさん(当時中学1年)からのメッセージ(2008年度鳴門市人権地域フォーラムの後)

(ゆっくりと、一言一言をかみしめながら)私にとって人権フォーラムはとてもいいことだと思います。でも差別がない社会だったら、こんなフォーラムは開催されなかったと思うので、このフォーラムの意味は、本当に大きなものがあると思います。

心に残っていることは、会場の受付で渡された「しおり」の言葉です。特にその中の「一人一人のあなたにありがとう!」という言葉です。この中にたくさんの気持ちが入ってるんだと思いました。何回読んでも心に残ります。また1日1日大切に生きていこうという気がしてきます。

語り合いの時も、自分から手を挙げる人がたくさんいました。私は何を言おうかとずっと考えていました。手を挙げようと思ったのですが、たくさんの方がいて緊張して手を挙げられませんでした。発表を聞いて、みんな差別やいじめに苦しんでいる人が、徳島県内だけでもこんなにいるんだなと思い、少し悲しくなってきました。

この人権フォーラムの意味は、たくさんの方がその人の気持ちになって考えるということです。みんなが、自分の中にある辛いことや苦しいことを他人にぶつけることで気が楽になります。語り合いは、みんなが自分の気持ちになって考えてくれます。とても嬉しいです。こんな学び合いが広がっていくことで差別をなくしていけると思います。

この生徒さんの「しおりの言葉」というのは、実は、2008年に2回目のパネリストとして話をさせていただいた時に、会場に来られたみなさんにメッセージとして贈らせていただいたものでした。その届けたかつ

た思いをしっかりと返してくださったことで、この生徒さんとは何年も個人的につながりを持たせていただくことができました。もう1人の生徒さんの感想を紹介します。

#### **悲しいことを明るくして、プラス思考で頑張っていこうと思う(2008年度鳴門市人権地域フォーラムの後)**

私は、今年初めて人権地域フォーラムに参加しました。会場には、たくさんの方が来ていたのでびっくりしました。初めはパネリストの人たちが部落差別について話してくれました。私も悲しいことを明るくして、プラス思考で頑張っていこうと思います。

あと、私がとてもびっくりしたのは、鳥取県や愛媛県、三重県など、いろんな県からわざわざフォーラムのために来られた人がいることを、本当にすごいと思いました。それに、会場の人も手を挙げて発表していたのですすごいと思いました。

私はいつも、今度は発表しよう、今度は発表しようと思っても、いざ会場とかに行ったら言えなくなってしまいます。だけど少しずつ頑張ります。

今日は、本当に来てよかったです。だから来年も機会があればまた行きたいです。絶対にこれからも続けてください。この人権フォーラムを…。

こんなやり取りをしていく中で、中学生の方から「Bさんは認めてくれた人のお蔭で変わったと言われましたが、本当にそれだけで変わるんですか？」と聞かれ、「変われます。私は変わりました。」そうお答えした後、出会う度に生き生きと変わっていった中学生の姿がありました。その人の今をありのままに認め、それを言葉にして届けることの意味の大きさを感じます。

#### **私にできること(届ける同和教育と心の耕し)**

私に何ができるんだろうと思った時、書くことが好きなのだから、学んだことをまとめて周りの人に届けることを決めました。看護師をしていて、時間をやりくりしながらいろいろな研修に行ける私が、聞きに行きたくてもどうしても時間が取れない仲間たちへ、講演記録を作り研修資料を作り、直接持っていき、会って、何故これを届けたかったのかを懸命に伝えながら届け続けました。このことを通し、私自身が本気で話を聞くようになりました。本気で学ぼうと思うようになりました。喜んで受け取ってくれる仲間のお蔭で、私は学ぶことをよろこびとして受け止められるようになりました。

そんな私の活動を「届ける同和教育」と名付けてくれたのは、長年いろいろ教えてもらってきた人権文化センターの所長さんです。「これまでの自分たちの解放運動は、人を集めて学んでもらうことが中心だった。これからは、こういう、こちらから届けていく同和教育の啓発も必要だ」そう言ってもらえたことは、20年以上続けてきた取り組みへの大きな応援メッセージとなりました。

そして、これまでの、たくさんの本気でその存在をかけて頑張っている仲間たちから教えられ、語り合い、受け止めた思いを私自身の言葉として伝えていかなければと、今強く思います。

#### **「私への応援歌」自分を振り返り、自分に問い続けながら昨日より少しはましな自分めざして**

昨年、自分のこれまでの25年間の同和教育との関わりを1冊の冊子にまとめてみました。自分自身の振り返りと、つながってきた仲間への感謝を込めて、これからも自分にできることをボチボチ頑張りに続けようという「自分宣言」を兼ねてまとめたものです。

同和教育と関わり続ける中でも、いつも元気いっぱいの時ばかりではなく、エネルギーの温度が上がったり下がったりします。だからこそ、時々関わり始めた頃の思いを振り返り、自分のたどってきた足跡を読み

返しながら元気の充電をしていこう。こうして文字という形で自分宣言をし、仲間に持っていてもらうことで後に引けない自分も作りながら、この私の生きる力そのものになっている同和教育との関わりをこれからも続けていこう。そんな思いも込めてつくった冊子です。

同和教育を学び続けるということは、自分を振り返り続けながら、少しでも輝いた生き方ができる自分を目指していく、自分育てを続けていくことなんだと思っています。

### **誰もがこの村に生まれてよかったと思える地域づくりをめざして**

地元高城地区の同和教育推進協議会の会長になって、10年間過ごしています。何を目指していきたいのかを考えた時、被差別部落・部落外に関わらず、地域の24ある集落に暮らす誰もが、「ここに生まれ、ここに暮らしてよかった」と思える地域を目指したいということに行きつきました。

会長になって10年余り経ちますが、会長になった頃によく聞かされていたのは、被差別部落の人々からは、「何で自分らが一生懸命勉強せないけんのか。差別する部落外の人が勉強せないけんだらう」部落外の人々からは、「自分たちはこうして学習会で勉強するけど、被差別部落の学習会の参加率はいつも低い。被差別部落の人がもっと勉強せないけんだらう」こんな声でした。

交流しながら学習を続ける中で、どちらの立場も一生懸命自分の村を良くしようと学び合ったり取り組んでいることに気づき合い、同和教育町内学習会として続けている学習は、どこに住んでいようが、すべての村で自分の村に誇りを持ち、安心して暮らせる村を作っていくための、地域全体に関わる学習の機会であることをわかってもらいたい。そんな思いから、学習のメインテーマを「安心して暮らせていますか？あなたは…」とし、地元にある様々な問題を取り上げ、統一テーマの下、進める推進員同士が協力し合い、相談し合い、議論し合いながら共に作り上げる学習会を目指してきました。

多くの地域での学習会は、行政の方たちが学習プログラムや資料を作り、指導員体制をキチンと整え、各地域や村や町を巡回しながら啓発活動を実施しておられますが、私たちの倉吉は、小学校区単位で、その同和教育推進協議会や、同和教育研究会で学習計画を自分たちで作成し、話し合い、自分たちの手作りの学習会運営をしていくという「住民主導型の学習運営」という形で取り組んでいます。私の地域では、そのメインテーマを決め取り組んできた10年を総括したものを資料化し、今年度の第1回推進員学習会で皆で学習会の意味を学び合う機会を作りました。

そんな中で、継続して推進員になってくれる人、真剣に質問し考えながら取り組んでくれる人、事前研修で集まったいろいろな立場の人がそれぞれの考えを出し合いながら、前向きに取り組める空気が定着してきたことに、継続とブレない思いを伝え続けることの大切さを実感します。

### **今一番の課題 …私から次へ…**

私の今一番の課題は、次に続いて先頭に立ってくれる人をどう育ててもらおうかという事です。私なりに思いを持って学習資料を作り、皆さんと議論し合いながら進められるようにはなってきましたが、資料づくりを人に任せきれない弱さが私の中にあります。「私でもできた」のだから、任せればいいのと思いつつもそれができないことが私の最大の課題です。

こんな私ですが、これからも自分にできることを模索しながら、同和教育を身近に感じてもらえ、学ぶことによるこびを見つけてもらえる仲間の輪を広げていこうと思います。何よりも、私自身が同和教育と出会ったことで、生き方が楽になり、たくさんの方から幸せをいっぱいもらうことができましたから。これで私の時間を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

ありがとうございました。(ゆっくりと精一杯の思いを込めて)十数年前になるんですけど、私は、倉吉市で同和教育の講演をしたことがあります。その時、その会場にBさんがおいでました。Bさんは、私の講演を録音テープに撮り、何週間か後に、私の講演記録を手書きでまとめ、送ってくれました。「これを地元の研修会で多くの人に読んでもらう。そういう使い方をしてよろしいでしょうか」ということで、その講演記録を地元の仲間に発信するという依頼でした。

手書きで、見事にまとめられた講演記録を読んだ時、「何でここまでのことができるのか」と思いました。それがBさんとの出会いでした。看護師をされていることを、後に聞きました。

昨日の人権学習の中でも、高校1年生の教え子たちの中に、富岡東高校羽ノ浦校の衛生看護科で看護師になるために勉強している高校生がいましたが、その高校生が、合同教室のステージ上から、藍住中学校の1年生に話をしてくれたんですけど、彼女が同じような思いを話しました。

「看護師に最も問われているのは、人権意識なんだ。差別意識がない。どの患者さんも、その存在を尊敬し大事にしていく。絶対差別をしない。本当に人を大事にしていく看護師に私はなっていきたい。そのために、私は人権学習にも頑張ってきたし、これからも頑張っていきたい。」

やっぱり、高校生の言葉が私の中にぐっと迫ってくるし、Bさんの顔が浮かびます。(力強く)幸せってというのは、私たちの中にあるんだと思います。「ひとごと」ではなく、この学びを通して私たちがこんなに解放され、幸せになっていく。そういう学びを積み上げていきたいと思います。

この会場に本当に温かいものを感じます。「教育はまなざし」という話をずっとしてきましたけど、やっぱり、必死に話を聞くそのまなざしに胸が熱くなります。必死に語る人、それを必死に聞く人。そのやり取りの中で生きる力というのは沸いてくるんだと思います。

この後、小豆島のCさんに報告をしていただきます。昨年、徳島県で「第65回の全国人権同和教育研究大会」が開かれました。今年の「第66回全国人権同和教育研究大会」は香川で開催されます。その「第66回全国人権同和教育研究大会」の開会行事の特別報告をCさんが担当することになっています。(じっくりと思いを込めて)小豆島の子どもたち、その子どもたちの輝きが、子どもたちの姿が、島を変えていく。地域を変えていく。人権教育の営みが、島を変えていく。そんな報告が、全国人権同和教育研究大会で行われます。その報告をCさんがします。

(笑顔で)今日は、その全国人権同和教育研究大会のリハーサルを兼ねて話をさせていただきます。全国人権同和教育研究大会香川大会には、この中でもたくさんの方が参加されると思うんですけど、今日の話聞いて、本番でまた聞いたら、すごい思いが伝わっていくと思います。ハードルを上げましたけど、Cさん、よろしくお願いします。皆さん、拍手をお願いします。(拍手)

## 《パネリスト C》

### はじめに

(元気よく)皆さん、こんにちは。(会場から、大きな声で「こんにちは」)小豆島からやってきました。土庄中学校のCです。(照れくさそうなさわやかな笑顔の中で)なんか、滅茶苦茶プレッシャーをかけていただきましたが、まだ、「全国人権同和教育研究大会」の特別報告の準備もきちんとできていません。

そんな中でも、僕が同和教育に出会ってこんなふうに変ったとか、ここにおられる方々とか、いろんな人と出会って、人権教育に対して学ばせていただいて、島の人権教育、同和教育が変わってきた。そういう流れを簡単にお話しできたらいいかなと思っております。よろしくお願いします。(笑顔で明るく誘いかけるように)それではまず、皆さん小豆島ってご存知ですか?行ったことあるよという方いらっしゃいますか?

けっこうおられますね。「二十四の瞳」とか、オリーブとか、つい最近では、「ビッグダディ」とか。これには、たまたま、うちの土庄中学校の子どもたちと一緒にちょっとだけ出演させていただいています。いろんな意味で、最近小豆島もクローズアップされています。

(表情を引き締めながら)小豆島は、自然も人も温かくて豊かでいいところなんですけど、つながりが深いゆえに切ない現実があったり、就職とか結婚とかのいろんな厳しい現実もあります。そういうことにそこまでわかろうとしてこなかった自分に気づいて、それでどうしようかということで取り組んだ流れがあります。

私も、高校を卒業して大学に行く時に、「こんな何もない島に帰ってくることはないやろ」と思っていました。でも、実際に島を離れてみると、島の良さとか人間関係の豊かさとかをどんどん感じて、島に帰ってやってみようかなという思いになりました。

(明るく)今、中学校の教員をしているんですが、僕自身は子どもの頃ドラえもんの登場人物で言うと、「ジャイアン」のような子どもでしたし、ちょっと前のアニメで言うと、「ど根性ガエル」の「ゴリライモ」のようでしたし、ジャイアンとゴリライモをたして2で割ったような子どもでした。

### **差別の実態を見ようとしていなかった頃**

やんちゃな子どものことはよくわかるだろうと思って、教員を始めました。最初はそういう子どもたちと関わるのが圧倒的に多かったんですけど、「何でそんなに勉強が嫌いなんやろ」とか、「何で学校に来れんのやろか」とか、いろんな意味で自分の中で疑問が出てきました。

もちろん、その子どもたちのお父ちゃんお母ちゃんたちと話をするうちに、「先生頼むな」という話になるので、「頑張ります」と言っていたんですが、今振り返ると、子どもたちの背景にあるもの、そこには部落差別を中心にいろいろな背景があったんですけど、その現実を自分はわかっていなかったなというのは最近つくづく感じています。

(切々と)ある時、僕が担任として持っていた子のお父さんが倒れました。お母さんが経済的なこととか、いろいろ考えて住宅に住む。いわゆる同和対策事業で作られている住宅に住む。そのためには、自分の主人と子どもたちに自分の出身などを伝えなければならない。どうしようと学校に相談に来られました。

僕も何にもわからなかった時ですけど、当時の教頭先生や同和教育主事の先生が「じゃあ、そういうことをやりましょう」となったんですが、当時は、まだまだ小豆島でも同和教育というのが大きな声でしゃべれないような時代でした。私自身、本当に何もわかりませんでした。

「とにかく勉強しよう」という所からで、「先生も勉強するから一緒に頑張ろうな」というふうにスタートしたのを覚えています。その時には、「部落差別ってどんな差別や?」とか、「本当に差別があるの?」とか、それでは自分に何ができるのかということは、答えが出ないままの疑問ばかりの日々でした。

### **同和教育との出会い直し**

(ゆっくりと当時を振り返るように)その答えが少しずつ見えてきたのが、転勤して隣の中学校に行った時です。その中学校に行ってから、いろんなことが自分の中で一つずつ解けてきました。その当時の子どもたちは、本当に人なつっこい大好きな子どもたちだったんですけど、「教室に入れない」「なかなか学校に来れない」という現実がありました。彼らは、「どうせ俺らはな」という思いでいたり、「それ、差別やろ」というのが口癖だったんです。

勉強が嫌いで、特に嫌いだったのが弁当の日でした。弁当をちゃんと作ってもらえていない現実もありましたから。そういう流れの中で、彼らの姿を見ながら一緒に学んできました。当時の先生方は一生懸命

頑張っていたんですが、「ちゃんとできていないからちゃんとさせよう」という思いがあって、例えば、「服装がちゃんとできていないから、帰ってちゃんと直してこい」という状況だったんです。そこにどうしても限界を感じていました。

私は、担当教員になって、「とにかく地域に入ろう」ということで地域に入っていました。当時、ちよぼ焼きとか、カス炒めとかで一杯やったりとか、隣保館に行ってじいちゃん婆ちゃんたちと世間話をしたりとか、ナマコを一生懸命さばいているお婆ちゃんの横で世間話をしたりとか、そういう流れの中で少しずついろんなことを語っていただきました。

例えば、補助金をもらう時に書類を書くんですが、名前を書く時、おばあちゃんが手に包帯を巻いて、「ちょっと手をケガしているから名前を書いてくれんか」と言うんです。字を書くのが得意じゃないという実態があります。地域の会館で一生懸命カラオケをしているんですが、そのカラオケをしながら文字を一生懸命覚えている姿があります。そういうことが後になってわかるようになりました。

(一言一言を確認するように)そういう流れの中で少しずつ話をしてくれるようになりました。「とにかく高校だけは行かせたい。でも、頼れるところは学校の先生しかないんや。」それから、「何が差別なんや。何でおれたち差別されるんや。」そういう思いをぶつけていただきました。僕も答えられないわけです。

「じゃあ、一緒に勉強しましょうか」「勉強会しましょうか」「保護者会しましょうか」という形で一緒に勉強を始めたことを覚えています。

そんな中で、年配の方が、「本当に学校に行けなかったんや」という思いや、「働かなあかんかったんや」という思いを話してくれましたし、勉強が嫌いじゃなくても、いつもそういうまなざしで見られていたので、自分を表現できなかったとか、そんな思いを伝えていただきました。

その当時行っていた隣保館の館長に、ある時言われました。「先生、部落問題って部落の問題か？」厳しい現実の中で、「かわいそうな子をちゃんとしてあげている教育」みたいに僕が思っていたのを見透かされたんだと思います。「部落問題は部落の人の問題」というふうに自分が間違った捉え方をしていたんだと思います。それをさらっと指摘されたような気がしました。そのことを通して「ああ、そうか」という気づきもありました。

### たくさんの人たちとの出会いの中で

(生き生きと)でも、そういう流れの中で人間関係ができてきますと、その出会いが楽しかったり、やっていることにやりがいを感じたり、本当に楽しくなってきました。そういう中で何か変えていかなければいけないということで、島に先輩の先生がおられるんですが、その先生といろんな所に行って研修をしました。

ちょうどその当時、A先生に出会っていろいろお話を聞いたり、高知県やいろいろな所の先生の話の聞いたり、質問をしたり、各地の進んだ取り組みを見に行きました。その中の一つが高知県でおこなっている「親子の集い」でした。そこでの1泊2日で子どもたちが宿泊研修する中で、夜、講師の人が話をします。その話してくれる大人の人は、自分の想いとか体験を一生懸命話をしますから、それを聞いて子どもらはポツリポツリと自分のことを話し出します。それを受けて、高知のお父ちゃんお母ちゃんが自分の育ちや願いなどいろいろなことを語ります。

そういう姿を見て、「これやな。うちの地域でできるかできないかわからないけど、とりあえずこれをうちでもやってみよう。」という事で地元に戻り、何人かの先生と相談をしてやり始めました。とりあえず第1回を始めたんですけど、最初に館長さんが、「自分たちの子どもの頃はこうだったんだ」ということを話し、「こんな願いをみんなに持っているよ」という話をしました。

それから、あるお父さんが、「俺は運動得意や。勉強もまあまあだった。でもな、何かをやるたびに『お

前らはどうせこんなものやろ?』と冷たく言われたり、『その地域のわりには頑張っているな』そのまなごしや言葉が耐えられないでいつも黙っていた。何か失敗すると、逆にその後はその言葉や態度のせいにして開き直っていった。お前らには同じ道を歩んでほしくないんや」という話をされました。

もう1人のお母ちゃんは、「自分は何も思わんと中学を卒業して働いたけど、やっぱり、今考えたらすごくしんどかった。家族の中でも職場でも肩身の狭い思いをした。あんたらは勉強せえや。」そういう話をしてくれました。

そういう流れの中で、子どもたちが、最初恥ずかしがっていた子や聞いていないふりをしていた子が一生懸命受け止めて、自分の言葉で返していきました。皆心が熱くなって、涙がこぼれる瞬間でした。この取組をちょっとずつちょっとずつ前へ進めていこうということでやり始めました。おこなっているうちにいろんな提案が出てきて、「じゃあ、自分のムラを誇るためにこんなことをしたらどうや」とか、「こんな行事を始めたらどうや」ということで、みんなが少しずつ少しずつ関わっていきました。

(思いを込めて)それをやっている時に、一つ大きな壁に当たりました。それは何かというと、そのムラの子どもたちや保護者の方がどんなに「頑張ろう」と立ち上がっていても、周りの支えがないことです。学校の中で自分の思いを語れる関係がなかったり、温かい空気がないと、常にしんどい思いをします。「いつもマイナスイメージで捉えているたくさんの地区外の保護者や子どもたちへどう発信していくか」というのがテーマでしたし、その時に、初めて僕らも差別というものに腹が立ったし、怒りを持ったし、何とかせなあかん」と改めて感じました。「じゃあ、もう1回いっぱいいろんなところに聞きに行こう」ということで、いろんなところに相談に行きました。

それまでにも、徳島県で全体学習をしているとか、いろんな取組を知っていたんですけど、「多分、うちの島の実態には合わないなあ」とか、「うちでは無理やなあ」というようなイメージだったんですけど、「改めて聞きに行こう」ということで話を聞きに行きました。ちょうど香川県内でもそんな取組を進めていたりして、県内の学校が京都の弥栄中学校とジョイント人権学習をするという話を聞いて、現場に聞きに行ったりしました。そういう中で少しずつ、学級とか学年とか全校で子どもたちが自分のことが言えるという取組が始まっていきました。

もちろん、体験した中学生はよくわかっていると思うんですが、一生懸命自分のことを見つめて、一生懸命自分の言葉にします。それを聞いた子が感じたことを返していきます。段々段々、空気が震えていって、その空気の中で高まっていって言葉がこぼれていく。「全体学習ってこんなことなんや」と実感する瞬間が何度もありました。

(切々と)それが何とか波に乗りかけたんですけど、正直、そこで止まっていた。やっぱり、同和問題を真ん中に置いて語るということが出来ていませんでした。その時に、A先生と教え子のお2人に来ていただいて、一緒に全体学習をやっていただきました。その時に、「これで最後にします。最後に言いたい人いるかな?」と言った時に、突然、スッと中学1年生が手を挙げました。「今、話に出ている地区に私は住んでいます。」と言いました。何の打ち合わせもしていませんでしたし、予想もしていなかったんですけど、そういう彼女の語りがうちの学校を大きく変えました。

(力強く)その語りの瞬間から、その学校では、「その子に対してどうするの。自分はどうするの。この問題をどう捉えるの」という事で、教師も生徒も本気になった瞬間でした。いわゆる、(前に掲げられたフォーラムのテーマを示しながら)ここに「わがこと」と書いてありますが、自分自身、改めて「わがこと」になった瞬間でした。

## 見えなかった姿が見えるように

そうこうしているうちに、私はまた転勤になりました。実は、元いた中学校に戻ったんです。その時の、中学校に戻った時の感じが、前にいた時よりもずいぶん景色が変わって見えました。それは、子どもらが変わったからか、自分が変わったからかわかりませんが、生きづらそうにしている子どもたちに気づきました。レッテルを張られている子、学校になかなか来れない子がいて、その背景に、子どもたちの生まれや育ち、家族のこと、保護者の国籍、虐待、障がい、いろいろな経済格差。そんなものがいっぱいあって、「子どもが自分のせいではないところで苦しんでいるな」ということに気づきました。

「なんとかこれが変わらないのかな」という思いで、また取り組み始めました。まず、大人の仲間をつくらうということで、先生方や、地域の行政の方や、指導員さんや、いろいろな人と話し合いをしながら仲間をつくってきました。子どもたちも、少しずつ語り合う学習を進めていきました。最初は、「そんなしんどいことは人前で言えんな。」「そんな、自分の思いは言えんな。」と言っていた子どもらが、自分のことが言えたらすごくよるこんで、「周りの子が言ってくれたから自分も返そう」そんな空気ができてきました。

### 人権作文「勇気の第一歩」

そんな中で、ある生徒が作文を書いてきました。これは資料にも付けていますが、ここで読ませていただきます。実は、私のクラスの生徒なのですが、この子は、家で「人権作文を書かなあかん。お母ちゃん、何書こう？」と聞いた時に、お母さんが子どもに漏らした言葉を一生懸命拾って、その時に書いた作文です。ちょっと読みます。

#### 「勇気の第一歩」

私は、差別をうけた事はありません。なのになぜ、差別を考えるかと言うと、私のお母さんが部落で生まれ育ち、さまざまな辛い思いを経験したことを聞いたからです。

お母さんが、自分の住んでいる地域が部落だと意識したのは、中学の頃、初めて友人の家に遊びに行った時のことだそうです。「おじゃまします。」と友人の家に上がった時、友人のお父さんはころよく「どうぞ。」と言ってくれました。いろいろと楽しく話をしているうちに「あなたはどちらの子どもさん？」と聞かれたので答えると「そう。」と笑顔で答えてくれたのですが、その場を立ち上がると奥へ行き、友人のお母さんに「あの子、大丈夫？」と言っているのが聞こえてきたそうです。家へ帰り、両親にその出来事を話すと、自分の立場と部落差別について聞かされ、すごくショックをうけたそうです。

それからは、二度とそんな思いをしたくなくて、自然と自分に合う友人を探して遊ぶようになり、部落差別をする人たちに反発するかのようになんてと不良ぶっていったそうです。そうして、何かあるたびに「あの子は部落だから。」と言われてきたそうです。

私から今のお母さんを見ると、私や家族のために一生懸命がんばっている、普通の優しいお母さんです。

お母さんは言っていました。

「部落を作っているのは差別するみんなの心だよ。部落を嫌がる人が部落を作っているんだ。」と。

部落だからあの子と遊ばないとか、部落の人はこわいとか、そういうことを言っている人と部落の人との間には、必ず深い溝ができていて、あまり親しくないように思います。だから、人と人との輪がすごく小さな物にも見えます。そんなことを言わない人の輪はとても大きな輪ができています。

「部落の人は悪い」と言うけれど、部落でない人だってまちがいや悪さはすることがあります。人の一部分だけ見て悪い悪いと決めつけたり、一部の人だけ見て部落の人はみんな悪いと決めつけたり、そんな偏った物の見方、考え方で人を不幸にすることは決して許されることではないのです。また、部落差別をしている人は、部落だけでなくいろいろな面で人を差別して、結局自分の友だちの輪を小さくしていつているように思います。それは、差別されている人を

不幸にするだけでなく、自分自身を不幸にしていることになるのではないのでしょうか。

私も、この作文にお母さんが部落出身と書くのはとても抵抗がありました。正直な気持ち、みんなに知られたくないと最初は思いました。なぜ嫌なのか答えが見つかりません。

ただ、部落だからです。ただそれだけのことで、私は大好きなお母さんを差別してしまうところでした。「差別はいけない」とえらそうに思っていたけれど、そう言っている自分の心の中にも差別の心があることに今回初めて気がつきました。その私がお母さんに対して、今どうすればいいのかを考えたとき、勇気をだしてお母さんのことを書こうと決心しました。これが今の私にできる差別をなくす第一歩です。

部落は何が違うのか。

私は今でも部落がなんなのかわかりません。だって、胸をはって堂々と生きるお母さんは、私にとって世界一のお母さんだからです。

2008年(平成20年)6月作成

という作文です。

(当時に思いを馳せながら)これだけ「部落」「部落」と書いていますから、選ばれるとは正直思っていませんでした。せめて、うちの学校の先生だけにでも、こんな思いの子がいることを知ってもらおうと思っていたら、校内の代表になりました。あれよあれよという間に、県の代表になりました。

全国へと候補にあがった時に、まず、法務局の方が来られて、「学校の名前を出しますか?」「本人の名前を出しますか?」という話になりました。いろいろ考えました。先生方とも相談をすると、正直、「こんなのを出したら大変なことになる。やめた方がいい」という意見もありましたし、「これを出さなかったらこの子の思いに応えることにならないだろう」ということも職員間で話し合いました。最終的には校長の判断もあり、出すことになりました。

当然、一番しんどい思いをするのはこの子とお母さんで、「それでは、この子やお母さんをどうやって守るか」という話になりました。この作文が出たことで、「すごいな」という声もいっぱいありましたし、「これは大きな第一歩ですね」という声もありました。でも「何で、いまさらこんなことを言うんだ」とか、「黙っていたらわからんことを何で言うんだ」という声もあったりして、大変この作文の反響は大きく、改めてこの作文の出たことの重大さを自分たちも感じました。とりあえず、この子の周りの子をどう変えるか。周りの子がこの子を一緒にどう支えていくかという事を職員で一生懸命考えて話をしました。でも、簡単に答えは出ません。とにかく一つずつやっつこうと話を進めていきました。

### 差別はする側の問題

(一言一言をかみしめながら)一つは、「保護者会を立ち上げよう」となりました。立ち上げる時に、一軒一軒に「こんな感じで保護者会をしてみませんか?」という話をしていきました。その時の反応は、「先生な、もう差別はないんや」という声もありましたし、「同和問題も大事やけど、まずは勉強を教えてよ」という声もありました。でも、「その言葉の裏にどんな思いがあるのか」ということを、私たちはやっとわかり始めていましたので、一つずつ一つずつ話を進めていくと、「中途半端にして荒れたらどうする」「大きくなったらうちでちゃんと教える」「これをするから差別が広がる」こんな声もあって、ずいぶん自分たちも自問自答して考えました。でも、「これしかないのと違うか」「同和教育を一生懸命前に進めるしかないのと違うか」と言いながら進めていきました。

取り組んでいるうちに段々空気が変わっていきました。「この会だけは遠慮せずに話ができる会や」「人一倍ちゃんとせないかん。私ら長いこと苦しい思いをしてきたから」などの思いとか、「子や孫も同じ目に合

うのか」という不安。でも、「こんな勉強があつてええなあ。うちの子も連れて来てええか？」という声も出てきて、最初はお父ちゃんお母ちゃん、おじいちゃんお婆ちゃんだけだったんですが、「自分の子どもも連れて来ていいか」「自分の孫を連れて来てええか」という話になって、だんだん進んでいきました。

そうやって、地区の子どもたちや保護者が少しずつ変わってきたんですが、やはりこの学校でも、周りの子どもの支えがあるのかということが一番問われることでした。それをどうしようかという話になりました。

(生き生きと力強く)今日も、町のスタッフの方とか指導員さんもたくさん来られているんですけど、その仲間で話をしている、「いろんな学校で人権集会をやっているけど、それを一回町でまとまってやってみようか」とか、中学生の語りを見てくれた先生方や、関係の方々が、「子どもたちのこの語りを大人に見せよう。この姿をそのまま町の人に見てもらおうよ。」ということで、土庄町の「人権フェスタ」が始まりました。

午前中各学校の子どもたちが発表し、お昼に講演をしていただき、その講演の感想とか、今まで自分の勉強してきた思いを全部含め、後半に中学生がその思いを語るという会をしました。

実は、その第1回に来ていただいたのが中倉茂樹さんでした。中倉さんに思いをぶつけていただきました。その思いを受け止めた中学生が何人もいました、その時に一番中心になって頑張っていた担任の先生も今日来ていただいています。

もう1人の子は、自分の母親の再婚で部落に住む。「その部落差別って何なんや」という思いが彼女の中にずっとあって、もやもやしていました。クラスの子と気持ちを段々と高めていったんですが、本番で周りの子どもたちはいっぱい語っていきます。「差別はだめだと思います。」ってもちろん言います。親と話をします。例えば、自分が結婚する時に反対されるかとか。それに対して意見を言ったら、親が、「お前は世間がわかっていない。そんな甘いものじゃない」と返された子もいっぱいいました。

彼女は、「みんなに自分のこととして考えてほしい」と願って、思わず手を挙げました。彼女は、「本当は怖いし、まだみんなを完全には信じられていないけど、やっぱり、あえて自分のことを伝えます。」ということで、自分の出身とか自分の現状を話しました。それに対して周りの子どもたちもやっぱり返していくんです。「今までと関係は同じや」とか「私もほんまは言えんことはいっぱいあるから、言えたのはすごい。」「私もその気持ちわかる。」とか、その場では全員は返せませんが、その会をきっかけに、周りのたくさん子どもたちが彼女に自分の思いを返していきました。

その時に私はたまたま司会をしていましたが、全身が震え、思わずみんなを抱きしめようと思った瞬間でした。その後、子どもたちの感想を読んでいますと、率直に、「この島にそんな差別があるって知らなかった。びっくりした。」というのもありますし、「何であの子がそんなことで泣かなあかんのか。そんな世の中がおかしい。」というのもあります。周りの子どもたちが変わっていったなと感じました。

この「人権フェスタ」が何回か続いていって、その後、大湾昇さんですとか、坂田かおりさんですとか、松村智広さんですとか、土田光子さんに来ていただいて、子どもたちと少しずつ前進させていっています。年によって、気持ちの高まりとかいろいろありますが、うまくいく年といかない年もあります。とにかくこの取り組みを少しずつ重ねていこうかなと思っています。

### **校内から町内へと広がる中で…生活体験を増やし自信を持てる子に**

(思いを込めて)こういう取組を始めてきたんですけど、一番の宝というのは、若者たちが変わってきました。この場にも来てくれていますが、自分のこととして考えてくれてます。小豆島で、みんなでちょっとずつちょっとずつこの取り組みを続けていきたいと思っています。

私自身、時には滅茶苦茶孤独になったり、逆に「俺ってけっこう頑張っているな」と調子に乗ったりして独りよがりになることもあるなど、いろいろな状況もありながら、みんなに支えられながら進んでいきます。

ある先生に言われたんですが、「あなたはどの立場に立つのか」ということですが、『立場宣言』『立場宣言』というけれど何を宣言するのか。『同和地区に生まれたかどうか』それも大事かもしれないけど、一番大事なのは、この世の中にあるいろんな差別を、なくそうと動く人間なのか、そうじゃない人間なのかその立場をきちんと表明せんか」と言われたことがあります。

それを私自身に問いかけながらやっついこうと思っています。この場で会った人とかいろんな人にアドバイスをいただいたりしながらやっついこうと思っています。これからもたくさんアドバイスをいただけたらと思います。よろしくお願ひします。今日はありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

(Cさんの思いに応えるように)徳島でも、いつもテーマになっていることだと思います。「教えるから差別が残る…」「教えなければいい…」「そんなことをしなければいい…」そういう状況で子どもたちは育っていく。学校で取り組まれた時に、「そういうことをするから…」そういうところをなかなか越えられませんが、「ひとごと」でしかない。遠くのことではない。「知らなければいい…」「関わらなければいい…」と言われます。

(力強く)でも、現実に部落差別は歴然と存在し、利害が絡んだ時に血を吹きます。深く学んでいくことの重要性、しっかりと知ること、そのことと向き合う力、おかしいことがおかしいと言える、どうしてそうなるか、どこに問題があるか、その問題の本質をきちんと理解していくことが、子どもたちに、私たちに、生き抜く力を育てていくことになると思います。

この後、Dさんが「人権を語り合う中学生交流集会」の、その19年の営みを話してくれます。今年19回目の「人権を語り合う中学生交流集会」の第2回目の実行委員会で、私は、28年前、藍住中学校で開催された「文部省指定同和教育研究発表会」での私のクラス、3年4組の公開授業の映像を子どもたちに観てもらいました。

その時の授業は「水平社宣言」を教材としたものでした。「部落解放運動」について学んでいく。「水平社」の立ち上がり深く学ぶ、まさに、部落問題そのものについて徹底的に学んだ授業です。その部落問題について語り合った授業です。その授業に取り組んだ43歳になる教え子たちが、その集会にゲストとして参加してくれました。

そのメンバーの中には、昨年まで藍住中学校のPTA会長をしていた教え子があります。現在のPTA副会長もいます。藍住町の職員として働いている教え子もいます。いろんな立場の教え子たちが集まってくれました。

その中の1人で、高校で社会科の教師をしている教え子がこう言いました。「徹底的に部落問題を学んだことによって、ものの見方、もの感じ方、社会の在り方、そのことを私たちはしっかりと捉えることができる。そのことによって私たちの人生は決定していった。今、私が社会科の教師をしている意味は、今日、みんなに観てもらった部落問題の学習、それが土台にある。」という話をしてくれました。

(一言一言に魂を込めて)中途半端に学んだら、生きて働くことにはならんかもわからんけれど、そのことを人との関わりや、その本質、何が問題なのか、どうしてそんなに差別意識が強いのか、どうして差別があるのか、どうしてなくならんのか、どうしたら乗り越えることができるのか、その中に生きてきた人々の思いや願ひ、そして、何が問われているのか、差別の現実を深く認識する中で、自分に問われるものを認識した時に、それは一人ひとりの生き抜く力になっていきます。

今年の「人権を語り合う中学生交流集会」の中で、子どもたちの具体的な生活の事実、語り合いが、子どもたちの中に人権を語り合うよろこび、人権を学ぶよろこびというものをしっかりと根づかせていきました。

ここに、今年の「人権を語り合う中学生交流集会」のポスターがあります。なんとも言えないさわやかなポスターです。非常に心にしみるテーマが記されています。

### 「みんなの心を幸せ色に 世界を平和でつないでいこう」

これは、中学生の言葉です。テーマの募集に対して、たくさんの中学生在応募しています。そして、ポスターの原画を募集します。中学生がつくる。中学生が輝く。それはやっぱり、地域社会を、私たちの町を本当に輝いたものにしていきます。この後、「人権を語り合う中学生交流集会」の具体的な営みをDさんが話してくれます。(Dさんに対しニコニコと、ちょっとしゃべりすぎたかな…。どうぞ。お願いします。(拍手))

## 《パネリスト D》

### はじめに 男子中学生の作文から

今、紹介いただいたDです。よろしくお願いします。(真剣なまなざしで)冒頭にですが、これから私が20分程度お話しする中で、中学生の3つの文章を聞いていただこうと思います。今、お父さんお母さんをしている方、かつてお父さんお母さんをされていた方、これからお父さんお母さんになるであろう方、聞いてください。

### 中学生の文章① 男子中学生の日記より

僕のお母さんは、僕が3歳の時に離婚しています。再婚したのは、僕が小学校4年生か5年生の時です。それまでお母さんは嫌がっていたけど、前のお父さんに会いに行っていました。再婚してからも一人で内緒で会いに行っていたことがあります。でも、もう2～3年会っていません。

前のお父さんに会いに行くと、母さんのことを聞いてくるけど、「再婚した」とは言えませんでした。もちろん、今のお父さんにも「会いに行った」なんて言えるはずありません。今日の授業で誰かが言っていたように、「両親のどちらを取る？」と聞かれたら、絶対に僕は答えられません。前のお父さんも好きだし、今のお父さんも好きだし、前のお父さんのことをたまに思い出すと、なんか複雑な気持ちになります。

何枚か、前のお父さんと撮った写真があります。今のお父さんに見えないように僕の部屋に保管しています。前のお父さんのことを思うと、今はそれが一番の宝物です。

6月に家族をテーマに授業をしました。今文章を紹介した子は、その授業の中で発言することはなかったんですが、翌日に今のような日記を書いてきました。(一言一言に思いを込めながら)教師をしていて、両親の揃ってない子が増えたなという事は感覚的にはわかります。統計も取っているかもしれません。けれども、両親の揃ってない子どもたちが、どういう心情で生活しているのかということについては、あまり私は知らないなあと思わせられた授業であり、生徒の感想でした。

### 中学生集会の立ち上がりの頃から今につなぐ思い

去年も、私はこのステージでお話しさせていただいたわけですが、その時には、入り口にも置いてあると思いますが、この「P・M(ペットボトル・マジック)」という小説を書いたことでこのステージに立たせていただきました。

これも私にとっては、「どう中学・高校生に『人権』という視点でアプローチしていけるのか、どうぶつ付けていけるのか、どうやれば共に歩むという道を作っていけるのか」というテーマで書いたものでした。

今から説明させていただきます「人権を語り合う中学生交流集会」についても同じです。(当時に思いを馳せながら)「中学生集会」は、19年前にスタートをしました。当時は、各中学校に同和教育主事という立場の教員がいました。その者たちで集まって、「中学生を集めて集会をしようじゃないか。」という事でスタートしました。

スタートした年は4校だけでした。大麻中学校、板野中学校、上板中学校、吉野中学校の4校でした。当時は、「学習会中学生集会」と言っていました。地区の子どもたちをそれぞれの学校での学習会だけではなくて、「他校にもこんな仲間がいるんだよ。交流しよう。視野を広げよう。これからの生き方を共に考えよう」ということで始めたわけです。

翌年から全県に声をかけて参加できるところから活動を始めたわけですが、今のスタイルとは違う形でした。今は、関わる教員に学校の人権教育主事という立場の者はいますけれども、当時のような同和教育主事の立場の者はいません。

今、私たちが関わっている「人権を語り合う中学生交流集会」は、立場を超え、無償で関わり続けています。私1人でできるわけでもありません。私は今、運営委員の代表としてお話しさせてもらっているだけで、実は、たくさんのスタッフがそれぞれの持ち場や役割の中で仕事を担ってやってくれています。

録音を専門にしている教員、録画を専門にしている教員、運営を専門にしている教員。いろいろな立場の教員が、それぞれの役割を担っています。私1人でやっていないことだけ知っていただければと思います。今年度の「人権を語り合う中学生交流集会」が7月28日にありました。

### 「いまだかつてない」語り合いの実現…

この「人権を語り合う中学生交流集会」で、2人の女性にお話をしてもらったわけですが、この2人の話が呼び水になりまして、いまだかつてないという言い方をすると、これまでも運営をしてくれている中学生に申し訳ないんですけども、それでもあえて言うならば、いまだかつてないような語り合い、話し合いが午前中からスタートし、スムーズに始まっていきました。

とっかかりは、自分に障がいを持っている兄弟がいるという訴えであり、語りでした。なかなかそのテーマでつながっていくという語り合いは見たことがないです。ないことはないんですが、あまりないです。それが、何人もつながっていきました。

その、中学生たちの生の声に驚かされます。「自分にはこういう障がいを持った弟がいるんだ。妹がいるんだ。」という語りです。それまでの私の記憶の中にも、そういうことを語った子がいました。けど、100名を超えた中学生の中で、堂々とそのことをしゃべっていく中学生がいるんだということに、まず驚きを持ちました。

実はその中で1人、うちの学校の女の子がいるんですが、その子の妹に障がいがあることは子どもたちは知っていました。家に遊びに行ったりしていましたから。ただ、そのことが公の場で話題に上るということはありませんでした。その子がどんなことを思っているのかなと思ったりはしますが、その子に発言を求めたわけでもありません。その子が今まで言えなかった、言わなかった、どちらかわかりませんが、その部分をきっちり自分の家族を見つめるきっかけになったらええなあと思いながら、「人権を語り合う中学生交流集会」に連れて行きました。一番最初から障がいをテーマとして語り合いが始まりましたから、「この女の子はどう思っているのかな」と、ドキドキしながら前の方から会場を見ていました。びっくりしましたね。その女の子が手を挙げて発言をしたんです。

それまで、積極的に発言するような女の子ではありませんでした。それは、彼女の書いた「人権を語り合う中学生交流集会」の後の感想文にも表れています。2つ目の文章として聞いていただきたいと思います。

## 中学生の文章② 女子中学生の感想文より

私は、人前で発表したりすることが好きではありません。苦手です。でも、頑張っただけで今日は自分のことを言うことができました。言いやすい雰囲気だったし、たくさんの方が発表していたからです。(これはおそらく、その場に居合わせた多くの他校の中学生の助けがあったからだと思うんです)

私には、障がいのある妹がいます。同じ障がいのある子を兄弟に持つ友だちは学校にはいないので、自分の辛かったこととか言えないでいました。でも、こういう集会では、私と同じように、障がいのある子を兄弟に持つ子がいて、私と同じような思いをしたことがあると聞くことができました。こんな思いをすることがあるのは私だけじゃないんだと安心できました。

こういう集会に参加して本当に良かったです。私は3年生なので、来年参加することができないけど、これからもずっとこの中学生集会が続いていったらいいと思います。続けてほしいです。この体験はずっと忘れないと思います。最初で最後の中学生集会だったけど、参加できて本当に良かったです。ありがとうございます。

この感想文を読んだ後、心の中でつぶやいた言葉があって、何かと言いますと、彼女の「ありがとうございます」という言葉です。「こちらの方こそありがとうございました」なんですよ。そう一言、私は心の中でつぶやいたんです。

## 中学生の言葉に心洗われながら

確かに、中学生集会に参加して同じ立場の友だちと話をしていく中で、「私だけじゃないんだ。べつに隠すことないんだ。同じような悩みを持っている友だちがいるんだ」ということがわかるというのは、彼女にとってはとても大事な時間だったと思うんですが、それは、彼女だけのことだけではなく、私にとってもありがたい、勉強になるし、ためになる時間だったわけです。心が洗われる時間だったのではなかったかなと思うのです。

そういう話し合いが午前中ずっと続いて行って、お昼からもずっとそのテーマは続いていくんですけども、その中で、テーマとして次に大きく出てきたのは、冒頭に私が紹介させてもらったような内容です。

つまり、「私には、お父さんがいません」「お母さんがいません」「両親がいません」「お母さんの顔を一度も見たことがありません。見たいです。会いたいです」という内容です。たくさんいるんだという事は感覚としてはわかってはいましたが、子どもたちの生の声で聞かされると、数だけの問題ではなく、より切実なものとして迫ってきたように思います。

繰り返しますけれども、それは仕方のない現実かもしれませんが、子どもたちがこれから生きていく人生の中で、自分の生い立ちをどう受け止めて生きていくのかという事は、すごく大事なことだと思うんです。

そういう話し合いがずっと続いていく中で、最後の子どもの文章を紹介する前に、ある子がこんなことを問題提起してくれました。「部落差別はどうしたらなくなるんですか？」このテーマで突っ込んで話し合いをする時間はありませんでした。ほとんどなかったと言っていいと思います。(精一杯の思いを込めて)私は、喉から出そうになるくらい「答えたい」という、その子に伝えたい思いだったんですが、中学生の会なので言葉をひかえました。私はすごく言いたかったです。(魂を込めて力強く)「今、あなたたちがしている、この本当の思いや本音の語り合いが、それぞれの中学校の学級や、学年や学校でやっていけるならば、そのことが部落差別をなくしていくことにつながっていくんだよ」と、すごく言いたかったです。(ニッコリと)今言えたんでスッキリしました。

こういう感想がありました。3人目の紹介です。今から紹介する感想文を書いてくれた女の子も、当日発

言をしてくれました。本人は、行っても行かなくてもどちらでもいいと言いながら、本人が来たいと言ったので、頑張っけて参加してくれたんですが、そこで手を挙げて発表してくれました。今日のこれくらいの人数より参加者が多かったと思うんです。

(会場に向かって問いかけるように)手を挙げて発表って、できます？私は、今だったらと思うんです。手を挙げる事を自分に課していますから。子どもたちに「手を挙げて発表しようね」と言っている以上は、自分がしなかったらうそつきだと思っているので、自分も会に出る限りは手を挙げて発言するようにしています。でも、13~14歳の時に果たして自分が手を挙げて話ができるか。皆さんはどうでしょう。皆さんはできるかもわかりませんが、私は、無理です。多分、聞いて帰るだけだと思うんです。聞いて帰るだけかもしれないけれど、魂のこもった言葉であるならば、きっと心に残って、中学生の時ではなくても、高校生の時でなくても、大人になった今だからこそかもしれませんが、話ができるかもしれないわけです。

けど、自分が中学生の時だったらしゃべれるのか。私は、「ごめんなさい」としか言いようがありません。だから中学生をすごいと思うんです。話がそれましたけれど、その頑張っけて勇気を出して手を挙げて発言した子がこんな感想を書いてきました。

### **中学生の文章③ 女子中学生の感想より**

**意見交換の時に言ったんですが、私の家族のことです。うちの家は、部落差別のことについて話していると、父が母に、「お前に別れた側の気持ちはわからんだろう」と言います。でも、それだったら逆差別になってしまうし、していた側の人のことを憎んでいることと同じことだと感じました。**

**人を憎むという事をする限り、いつまでたっても差別はなくならないと思います。父と母、どちらが正しいのか私にはわかりません。しかし、よく考えてみると、私は父のことを考えられていなかったと、後になって思いました。父は昔、とてもひどい言葉を言われていたのに、そんな父を否定するようなことを言っていたのだと気づき、後悔しました。**

**今回の交流会は、本当に有意義な話し合いもできたし、後悔はありません。今回学んだことをこれからの人権活動に生かしていきたいです。**

部落差別があることで、家の中で家族関係がおかしくなる。おかしい話ですけども、それも現実なんだと思います。「お父さんに、もし、今日のような語り合いや集会や学習との出会いがあったら、お父さんは今、そういう言葉は出ないかもしれないね。お父さんが受けてきた学習、それから、今、あなたが中学3年生として受けている学習、そして、『人権を語り合う中学生交流集会』での学び。あなたが受けているこの学びを次世代につないでいこうね。」こういう話を私は彼女にしました。

### **今、目の前にいる子どもたちとの日常を大事にしながら、次の集会に向かって…**

「人権を語り合う中学生交流集会」は、来年で20年になります。先ほども言いましたけども、立場として「人権を語り合う中学生交流集会」を運営しているわけではありません。それはおそらく、他の先生方も同じだと思います。いやらしい話ですが、手当出ません。報酬もありません。何のメリットもありません。

ではなぜ続けているのかと言えば、やっぱり、年に一度、中学生の生の生き生きした言葉や姿や生きざまが見られる。だから、残りの364日頑張れるんだと思うんです。来年20年目になりますけれども、又、どんな会になるのか、今から楽しみです。

同時に、「人権を語り合う中学生交流集会」運営委員会の活動は、集会のためにという事がメインなので、来年の「人権を語り合う中学生交流集会」に向けて、今、自分の足元で、自分の目の前にいる教室の中学生、それから、今いる中学校の子どもたちと、どう向き合っけて「人権を語り合う中学生交流集会」に向かっけてい

くのかを模索しながら、これからも一日一日を楽しみながら頑張っていきたいと思います。以上で、終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

この後、休憩を取りますが、中学生集会は本当に感動します。精一杯の言葉というのは、心にしみていきます。このフォーラムもそうだと思います。安心して自分のことが言える。それを聞いてくれる。返してくれる。その関係の中で人間は救われていきます。

「このことは誰にも言うことは絶対ない」と思ったこと。「ずっと隠し続けていく」と思っていたこと…。それを語った時、それに返してくれた時、これだけの仲間がいるという実感が生まれた時、世界が変わっていきます。

子どもたちのまなざし、子どもたちの輝きにいっぱい力をもらいながら、仲間の教師と、毎年「人権を語り合う中学生交流集会」のすべての記録を1冊の本にしてきました。そして、その内容は、年々膨らんできました。子どもたちの感想を全部入れています。無記名です。書いた本人にはわかりません。でも、これはここに参加した全員に配っています。

(精一杯の思いを込めて) 読み続けてほしい。中学1年の時、こんな思いを語った。中学3年の時、こんな思いがあった。あの感動をこういうふうにした。その文章はその子自身のものです。そして、その時の仲間の思いを大事にしながら、この冊子が一人一人の子どもたちの中に生き続けていくんです。

人権教育は、よろこびです。よろこびにならないと本当に進みません。それは、自らが解放されていくよろこびです。自分が出会い直しをしていくよろこびです。自分の中にあった卑屈なものが解き放たれていくよろこびです。

そんな世界を、この休憩の後、マイクを握ることを通してつくりたいと思います。「人権を語り合う中学生交流集会」の記録集の在庫が何冊かあったようです。先ほど紹介して頂いたD先生の「PM(ペットボトルマジック)」も受付の方に置いてあります。よろしければ見てください。それでは、15分間休憩を取ります。

#### 前半終了

#### =意見交換=

#### 《コーディネーター A》

(会場のざわめきを鎮めるように)はい、それでは後半を始めたいと思います。限られた時間ですけど、できるだけ多くの方に、自分を語る、そんな「よろこび」を感じていただける時間になればと思います。

(誘いかけるように)子どもたちによく言うんですけど、「ひとごと」で聞いたらドキドキしません。でも、思いを返す、発表するか発表せんかは、一人一人が決めていくことですが、自分が精一杯の思いを返そうと思ったら、次に手を挙げようと思ったら、ドキドキします。

そのドキドキが、仲間の思いをしっかり聞こうという気持ちになります。語り語りを生んでいく、その中で自分の本心が見える。自分の心の内が出せる。そういう関係の中で、私たちの人権意識というのは磨かれていくんだと思います。

「人権を語り合う中学生交流集会」に関わった、そんな生の声も聴いてほしいと思います。それでは挙手をしてください。(前の席の高校生に温かいまなざしを送りながら)いきましょうか。(高校生の応えようとする姿にニコニコと)マイクをお願いします。「人権を語り合う中学生交流集会」昨年の実行委員長です。

## 《フロア S》

徳島北高校のSと申します。(ニコニコしながら)中学生と言っていたのに、高校生ですみません。この会に来させていただくのは2回目です。今年は1人で来たというか、中学生の仲間が来るのでついてきたという感じです。昨年、「人権を語り合う中学生交流集会」の実行委員長をさせていただいて、自分の中では人権意識っていうのが一步上がったかなというのを感じています。

今年の「人権を語り合う中学生交流集会」も、高校生ですが、参加させていただきました。(生き生きとした笑顔で)「人権を語り合う中学生交流集会」で、手を挙げようかなと思っていたんですが、今年の集会は迫力があって手が挙げられませんでした。私が中学生だった時よりも、みんな仲間を信じて、手を挙げて自分の気持ちを語るということができていて、「私、去年なまぬるかっただな」って思います。

(しっかりと落ち着いて)昨日、藍住中学校の学年登校日に(卒業生として)参加させていただきました。200人越えの中で話をさせていただいて、すごく緊張しましたが、眠そうにしていた子もいましたけど、真剣に話を聞いてくれて、とても自分の中でも思い出に残る会だったと思っています。

『ひとごと』から『わがこと』へ」という言葉を聞いて3年になります。「ひとごと」ではなくなったかなと思います。でも、『ひとごと』から『わがこと』へ」となったかなというのは、今のところなっていないかなと思います。

というのも、中学校でも話をさせていただいたんですけど、「部落問題」というのも直接感じたこともありませんし、いわゆる「人権学習」っていうのは、先生に声をかけてもらわないと行かないかなという感じのものなので、誰かの意見を聞いて、こう思うということしか発表したことがなくて、自分のことはあまり言ったことがありません。

ここで最初に話をするというのもすごく緊張しているんですけど、前だったら、マイクを持って話をするというだけで、泣きそうなほど緊張していました。今もそうです。でも、これだけ長い時間、自分の中で話ができるようになったというのも、A先生のおかげですし、中学生集会のお蔭だと思っています。これだけ大人の方で席が埋まっているということは、人権に対して広がりようのある問題だと私は思っているんで、今日は平日だったので無理ですが、休日とかにこういう集会在どこかであった時には、(少し照れくさそうに)自分の親も連れてこようかなと思っています。

家でこういう問題について話をするのもないですし、自分から話をするのもちょっと胸が苦しくてできないので、たくさんの方が話をさせていただいて、それを聞くというのも、人権に対する意識っていうのは持ってもらえると思っているので、これから参加するっていう時には、家族とか自分っていうのをもうちょっと考えて来たらなと思っています。ありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

少しでも多くの方の声を届けてもらえたらなと思っています。手を挙げてください。どうぞ。

## 《フロア S》

(明るく元気よく)藍住中学校の2年生のSです。私は、去年の中学1年生の時から「人権を語り合う中学生交流集会」に参加しています。去年は、さっきの先輩が実行委員長でしたが、来年は、私が実行委員長をしていこうかなと思っています。

去年は、初めてだったし、どんなところかもわからなかったし、何を言っているのかもわからなかったし、ただ、みんなの意見とか感想とかを聞いて、人権の勉強を話に来ているんだなと思って、そういう人がたくさん集まっているところがあるんだなと思って、何か私も自分の考えを言えたらなと思って、頑張っ

を言っていました。

でも、今年は頑張ると言うのではなくて、自然と自分から手が挙がって、さっき、D先生が「弟に障がいがある子」っていうことを言われていましたが、自分も弟に障がいがあって、気持ちとか思いが溢れて来て、気がついたら手を挙げてマイクを持っていました。去年の自分ではなかったような話し方っていうか、全部思っていることを言いました。そしたら、たくさんの反響というかどどんつながっていったので、すごく幸せな時間でした。

今年の「人権を語り合う中学生交流集会」では、暗い部分もたくさん出ていったんですけど、お母さんがいない。お父さんがいない。先生が、「お父さんがいないから幸せじゃないんか、お母さんがいないから幸せじゃないんか、弟が障がいを持っているから幸せじゃないんか。」そういうことを尋ねられた時に、私は、弟に障がいがあるんですけど、それは幸せじゃないと思ったことはなくて、むしろ、幸せです。

(生き生きと)私の弟は「ダウン症」という障がいを持っていて、でも、私は弟のことが大好きで、天使に見えるし、弟は小学2年生なんですけど、もっと中学生集会だけではなく、教室とか、いろんな場所で自分の思いがたくさん言えるようになったら本当にいいなと思います。

教室で言うのは、今は勇気があるなと思っているんですけど、自分から進んでやったら、もっと輪が広がっていくと思うし、今年の「人権を語り合う中学生交流集会」での、同じ学年2年生の参加は少なかったけど、来年は同じ学年の子にももっともっといっぱい参加してほしいなと思うし、もっと、人権を学ぶ、こんな場所があるということを知ってもらいたいと思います。このくらいで終わります。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

(一言一言を大事にしながら)会場いっぱい思いが広がって行って、それに思いを返したくなるんですけど、そんな言葉の力を持っている中学生がいっぱい育っていきます。安心して自分のことが言える。そのことを一生懸命聞いてくれる。そして、思いを返してくれる。人権学習の本質、よろこびはここにあるんだと思います。

2人の中学生、高校生の語り、(言葉を楽しむように)来年は第20回の「人権を語り合う中学生交流集会」、実行委員長が今、ここで決まりました。(会場に笑顔があふれる)ぜひとも来年参加してください。いっぱいの感動が広がると思います。それでは、中学生・高校生が続きましたので、中学生以外の方でマイクを持っていただいて…。じゃあ、お願いします。

#### 《フロア M》

失礼します。今日は香川県の坂出市という所から9名で参りました。さっきの子が、一生懸命中学生集会の話し合いをしたという話を聞きながら、自分は黙って、しかも3列目に座っているのが恥ずかしいなと思って聞いていました。実は、少し悩んでいることがあって、今日はそのことを聞いてもらえたらうれしいなと思って、チャンスをうかがっていました。

15年前にも東部中学校で先生方と色々な取り組みをしていたんですけど、この4月に校長としてその中学校に帰ってきました。東部中学校でこんなことを取り組みたいということをA先生にお手紙を書きました。そうしたら、力強いお返事を頂きました。

今悩んでいることというのは、実は、今の中学校でもいろいろな取り組みをしているんですけど、いろんな「ひとごと」にはたくさん出会うんですが、自分の問題として同和問題であるとか、障がいのある子どもたちの問題であるとか、ハンセン病の問題であるとか、「わがこと」として出会えていないんですね。

やはり、ちゃんと出会わないかんのじゃないかということで、先日、岡山の朝鮮学校のサッカー部の子ど

もたちと、練習試合を行いました。(本校にも4人女子のサッカー部員がいて、朝鮮学校の2年生にも女子部員がいます。日本人と朝鮮人の)女の子同士が交じりあって試合をする。相手が「在日の子」というだけであって、サッカーを愛する中学生同士どんな出会いがあるのかと楽しみで、そんなすばらしい出会いを実現することができました。でも、練習試合をやるということに関して、「何でそんなことをするんだ」というメールが入りました。

どんなメールかと言いますと、「北朝鮮がどうのこうの…」「テポドンがどうのこうの…」そんな内容です。そんなことは本当は全然関係ないですよ。朝鮮学校の成り立ちや、サッカーをやっている子どもたちには、テポドンを発射することとは、全く関係ないんです。けれど、そんなことを思う人からメールが来ているわけで、「校長が無理を言って、サッカー部の顧問がしぶしぶやらされているんじゃないか…」そんな文面のメールでした。

先生方と、「じゃあ、朝鮮学校とのサッカーの交流は、どうするの…」となった時に、先生方も朝鮮学校について何も知らないんです。朝鮮学校がどんな学校か、どんな子どもたちがいるのか、何も知らないんです。みなさんは知っていますか？ 知らないでしょう？ 何も知らないであれこれ、とやかく言うのを日本語で何と言うのかというと、それを「偏見」と言います。まさにそうなんです。

その朝鮮学校の舞踊部が素晴らしい朝鮮の民族舞踊を踊っているんです。そんな子どもたちの踊りをビデオなどで見せるよりも、校内の文化祭、合唱コンクールの時に来てもらって、目の前でじかに見せたいんです。本当に朝鮮人であることに誇りを持って、しっかり練習して子どもたちが踊っているのに、その子どもたちを招きたいと言っているのに、若い先生たちは「やろうやろう」と言うんですが、「それはよくない。慎重にやるべきだ…」などと言われて、「さて、校長としてどうするべきか」そんなことを悩んでいました。

今、D先生の話聞いて思いました。「何をそんなつまらないことで悩んでいるんだろう」と思いました。今日、ここで中学生が頑張っている姿にふれながら、D先生がおっしゃっていたように、「今日の出会いのおかげで、残りの364日、また頑張れます…」そんなふうに思います。こんなことをいうと一緒に来た先生たちは、実は困っていると思うんですね。校長が「こうやります。」と言えば、「それは無理です。」とか「だめです。」とは(なかなか)言えないんですよ。(会場に明るい笑い)

昨日一昨日と、「どうするべきか」と2時間くらい話し合っていました。答えは簡単なんですよ。校長が責任を取ればいいんですよ。簡単にはクビにはならないので、それに、ここでこう言ってしまいましたから、もしよければA先生にもご案内したいと思います。「校長先生、あんなことを言っていたけど、やっぱり朝鮮学校の生徒を呼ぶことができなかったね…」ということにならないように、私も香川で頑張ります。

今日伺った「人権を語り合う中学生交流集会」ですか？うちの中学生もそこへ来たらいいなと思いがら、そこへ向かっていけるように頑張ります。C先生はじめパネリストの皆さんありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

ありがとうございました。できるだけ多くの方、いろんな立場の方の声が聞けたらと思います。挙手してください。

## 《フロア 中学生》

先ほど話を聞いている時に朝鮮人という単語が聞こえてきて、思い出したのですが…。私たち日本人は、中国人、朝鮮人、韓国人に対してひどい偏見…?をしているように思えるんです。例えば国旗を見ただけで「ムカつく、消えろ」など言っている人をたまに見かけるんです。そして、なぜ日本人はひどい偏見をする

のか、それはニュースなどから入ってくる情報を完全に信じ、そして、その情報にばかりにとりつかれるからだと思うんです。そのことを「固定概念」？でしたっけ？固定観念？とりあえず固定観念があるから、偏見が生まれるんだと思うんです。

ニュースは、人にニュースを見てもらうために、それなりに食いつくようなニュースを持ってきてるのかもしれませんが。だから中国などで起きてる悪いニュースばかりを日本人に伝えてるかもしれないんです。本当はいいニュースもたくさんあるはずですよ。なぜなら中国にもいい人はたくさんいるからです。しかし、これを日本人は、固定観念によって全て悪いとしているように思うんです。だから私たちは一人一人を見ていないんです。しかもその固定観念によって、「中国製品は悪いから買うのは控えておこう」など言いますが、それは一部であって全てではないですよ。なぜなら周りを見渡しても中国製品ばかりだと思います。私たちは日頃、「やっぱり日本製品がいいな」と言いますが、実際つくっているのは中国なはずですよ。

それにニュースの話の話を聞いていても、日本では毎日のように悪いことが起きてるように聞きます。決して日本人全てが善というわけではないはずですよ。実際日本では同じような形で部落差別が起きています。だから私たちが中国人、韓国人、朝鮮人の人全てを悪いと言ってはいけないと思うんです。私たちはもっと一人一人を見ていくべきですよ。そして固定観念による偏見を捨てなければいけないと思います。固定観念による偏見が少なくなれば、自然と差別も減っていくと思うんです。

#### 《コーディネーター A》

ありがとうございます。中学生はさらっと言葉にしますが、次に手を挙げようと思ったらドキドキします。マイクを握ったら頭の中が真っ白になります。そこで必死の言葉が出るんです。そういうドキドキした気持ちで話を聞いたら、身体が熱くなります。

人権学習の本質は「共感」です。共感と連帯の絆の中で、私たちの行動が変わっていくし、私たちの生活が高まっていくんだと思います。

限られた時間です。1人でも多くの方にマイクを握ってもらいたいと思います。中学生以外の方で、よろしくをお願いします。どうぞ。じゃあ、一番後ろ。

#### 《フロア F》

後ろから失礼します。20年くらい前に、A先生やD先生と一緒に板野中学校で全体学習をやっていた者です。さきほどの中学生のみなさんの話を聞いていても、自分の心にある思いを本気で一生懸命語っている人は、自分がある程度自己認知している人だなと感じました。

私も人権学習をみんなで行っていく時に、自分の中に間違った考え方をいっぱい持っていたし、偏見もいっぱいあったし、だけど、生徒たちの語ってくれる言葉の中から、同じ仲間の語ってくれる言葉の中から、真剣に自分と向き合って、自分はどんな生き方をしたいのかということ、結局は人権学習は自分のことなんだということを生徒から一生懸命学びました。

その中で、私は英語の教師なので、自分が生徒に向かって一生懸命できることは、もちろん生き方を一緒に考えることであったり、教科授業の中で力をつけることだと思って、一生懸命頑張ってきました。その時に生徒たちとつないだ絆、先生方とつないだ絆というのは、離れていても20年経っても、全然変わらないなと今感じています。(元氣よく)A先生、D先生、思っていますか？(会場に明るい笑いが溢れる)同じように思っていますか？(2人の、言葉に返すようにうなずく仕草に)はい、ありがとうございます。

私の教えた生徒が、今、33歳くらいだと思いますが、全体学習で語ったことを、「いろいろ考えが変わってきた」ということも言っていたりするんですが、その時心の中に響いて、自分が一生懸命考えたことって

いうのは、やっぱりどこか真実で、自分が生きる方向性というのを決めるので、そこからまた考え直すということもできて、とにかく、語っていくことは、自分の生きる力をつけることなんだということを、今日も皆さんの発言を聞いていて思いました。さっき、男の子が「自分の家の人に言ってみた」と言っていて、すごい葛藤があって、でも、この子はすごく闘ったんだなと思って感動しました。

私も、これからいろいろあるとは思いますが、皆さんと一緒に頑張っていきたいと思います。香川県の集団で来られている先生方ともつながっているいろいろ話をして、語り合っていきたいなと思っています。これからもよろしくお願ひします。ありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

時間が来ました。あと、1人か2人。

#### 《フロア O》

失礼します。小豆島から来ました、Oと申します。さっき、坂出の学校の先生が言ったみたいに、小豆島にも、フィリピン人とか、お嫁に来たり、稼ぎに来たりしている人がいっぱいおるんですが、自分の親せきにもフィリピンから来ている人がいて、仕事に就いても、「この人はフィリピン人だから言葉がわからない」と勝手に日本人が決めて、「使えない」とこちらで勝手に決めつけていることが多いと思います。

人種差別だけではなくて、部落差別でも、根底に自分たちの「無知」あるのかなと最近思います。自分が部落差別を勉強しだしてからずっと考えてきたことで、さっき、C先生も言ってくれた、「全体学習の最後に打ち明けた」というのも私なんですけど、その時も、自分が部落の人間だということは、いろんな人との出会いの中で、小学校6年生から中学校1年生までの間に知ったんですけど、自分が「部落に住んでいます」と手を挙げて言った時に、自分が「部落ってどんな所なんやろ。自分が言った限りはもっともっと勉強していかな」と気がついたんです。

今年の「人権を語り合う中学生交流集会」でも話をさせてもらって、中学生からこんなにパワーを頂いて、「中学生って、すっごいいなあ」と思って、先生が振らんのに、「はい、次、誰々いくで…」というふうに中学生がバンバン手が挙がって、絶対こんなしんどいことは言えんやろ…」ということまで、言葉を詰まらせながら言っていたのが頭に焼き付いているというか、「今からこの子らと一緒に勉強していくのが楽しみやな…」「中学生と一緒に勉強していかないかん…」という思いにさせられました。

徳島県の中学生とつながりができたというのが一番良かったことで、鳴門にも、毎年先生たちとのつながりで来ているけど、この鳴門でも、毎年毎年違う出会いがあって、今年、中学生集会で出会った人とも「久しぶりです」とか話ができ、Bさんとも会えたし、いっぱいいっぱい力をもらって帰って、また、小豆島へ帰ったら、またゼロから部落問題や人権問題の勉強をしていこうかなと思えるような会になりました。今日は、3人のパネラーの皆さん、ありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

どうでしょうか。もう1人くらい。はい、どうぞ。じゃあ、お願ひします。

#### 《フロア N》

神奈川県藤沢市から来ました、Nです。何回もこちらにお邪魔しています。退職して4年目になりました。香川の校長先生、頑張ってください。お気持ち、よくわかります。前に同じ立場にいましたから…。

今、仕事もしているんですが、土曜日の5時から9時まで「学習支援ボランティア」をしています。すご

く格差が進んでいるなどということを感じています。私たちは、人数は少ないんですが、そこに来る子どもたちは、塾に経済的に行けない子もいるし、塾に行くと、そこでまた比較されてしまうのが嫌な子もいて、小学校、中学校と色々な所から来ています。

その中に…。ある小学校2年生の子がいて、学校で「九九」を勉強していました。これから学校で習うことを、習う前に学習しているんですね。知らないとかバカにされるみたいなことがあって、こちらとしては、教えてほしいというから一生懸命教えるんですが、なかなか覚えられなくて苦労していました。でも、ある時、急にできるようになって、不思議だなと思います。

そんなことを繰り返していますが、ある時、学習の時間を終わって、お母さんと帰る時、私も帰りに同じバスに乗りました。バスの中で、椅子にもたれて「はあ…」とため息をついていたら、一緒に乗っていたその小学校2年生の子が、「おじさん、教えるの疲れる？」って言うから、正直に「うーん、疲れるね」と言ったら、(ニッコリしながら)その子も、「僕も、覚えるのすごく疲れる」って言うわけです。(会場に微笑みが広がる)そういうのをすごくうれしくなったんです。そういうことをうれしく感じられる自分がうれしくて…。そして、こういう所に来て、子どもたちのすごい姿とかに出会い、子どもたちと学んでいけるのはいいなと思っています。ということで、いつもありがとうございます。(拍手)

#### 《フロア K》

藍住中学校3年生です。私も「人権を語り合う中学生交流集会」に参加しようと思ったのが、発表するのが好きで、友だちからそういう会があるというのを聞いて、A先生に参加したいと言って、出させてもらいました。

その「人権を語り合う中学生交流集会」に行くと、弟が「障がい」を持っているという話をしているのを聞いたり、みんなの発言を聞いていて、私も弟のことを話をしようかなと思いました。みんなも普通に弟や妹のことを話していて、私も安心したところがあって、私がずっと考えていたのは、弟が障がいがあるから嫌いというのではないけど、なぜか、自分の中で友だちに紹介するのが嫌で、いじめられるのが怖くてごまかしていました。

でも、「人権を語り合う中学生交流集会」で思ったのが、弟を差別していたのは自分だったと思い、バカだなと思ってしまって、みんなの話を聞いていたら、弟が障がいがあることは隠すことじゃなくて、自分が堂々としていけば怖くないと思うことができました。

「人権を語り合う中学生交流集会」でD先生が、家族ということで、「両親がそろっていなければ幸せじゃないんか…。」「お母さんが1人しかおらんかったら、お父さんが1人しかおらんかったら幸せじゃないんか…」と言われた時に、私は、「違うなあ」と思いました。お父さんがいないから幸せじゃないとか、お母さんがいないから幸せじゃないとかじゃなくて、どういうことが幸せなんだろうと考えた時に、その時には考えることしかできなくて、「人権を語り合う中学生交流集会」が終わった後もずっと考えていたら、小さなことでも一言でも幸せってあるんだと気づかされたので、…お父さん、お母さんがいない人でも、幸せってというのはそばにあるので、自分から幸せを探していってもらいたいなと思いました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

ありがとうございました。中学生の自分を語る、その言葉が、その子自身を癒していきます。そして、仲間を癒していきます。自分のことを言わなければいけない、言いたくて仕方がない。そういう関係の中で、深い深い絆が生まれていきます。

(精一杯の思いを込めて力強く)毎年思うことですが、子どもたちの生まれを変えてやることはできません

ん。でも、見事に生き方が変わっていく。幸せは一人一人の心が決めていく。卑屈さから解放されていく。キラキラ輝くその表情に、その言葉に、やっぱり感動します。胸が熱くなります。こんなところで泣いたらいけないんですが、こみ上げてきます。ありがとうございます。

そのベースは一人一人の家族です。いろんな現実があると思います。学校での問題も出ました。「そんなことをするから差別がなくならんのだ…。」と返しが来る家庭があるかもしれません。そこで一生懸命お父さんを信じて、お母さんを信じて、一生懸命返していくのは「聞いてくれる関係」です。家族の中でいっぱい話ができる関係です。

なかなかわかってくれんことがあるかもしれません。わかってくれんからこそ、必死で話ができるんです。必死で伝えようとする事ができるんです。そのことで、また、私たちは学ぶことができます。

なかなか啓発が進みません。教育が進みません。だからこそ歩き続けていくんです。昨年、私は、彼女のクラスで社会科の授業を担当しました。(うれしそうに声を弾ませながら)まなざしがまぶしくてまぶしくて、一生懸命聞いてくれるその表情に力がわくんですよ。本当に力がわくんです。教えるってこんなに楽しいことかと思うんです。必死で聞いてくれるから…。

(力強く)やっぱり家族なんです。家族で、職場で、しっかりと語り合える人権学習でありたいと思います。最後、3人のパネリストの方の言葉でこの会を閉めたいと思います。お願いします。

## 《パネリスト B》

今日は、皆さん本当にありがとうございました。(精一杯の思いを込めて)最後に私ごとですけれども、私の夫は、先月17日に、1年3か月の癌との闘いの末に命を終えていきました。「おかあはまだ来んか」と言いながら私を待ち、私が病室に入って一言二言言葉を交わした瞬間に心臓が停止しました。子どもたちが、兄弟がまだ来ないからと言って心臓マッサージをしてやり、子どもや孫や兄弟など、身近な親族がほとんど揃ったところで静かに息を引き取っていきました。

通夜の日、ちょうど60歳の誕生日でした。私たち家族は、病室で誕生祝をしてやろうと計画をしていました。通夜の儀式が終わった後で、一番身近な身内でメッセージを色紙に書いて、みんなの中で自分の書いたメッセージを自分の言葉で伝えあいながら、賑やかなことが好きだったお父さんだから賑やかに送ってやろうと言って、そんな通夜をしてやりました。その中で、うちの3人の子どもたちが、「お父さんもお母さんも60歳だから、記念の額を作ろう」と言って、大きな額を作ってくれていました。その額の中に込められたメッセージをみなさんに紹介させてください。メッセージの中に、夫の名前と私の名前が色が変わって織り込まれていました。

### 感謝のキモチを込めて いつもありがとう

**お父さん、いつも一生懸命 家族のために頑張ってくれて**

**いっぱい守ってくれて 本当にありがとう。**

**いつもいつも頑張っている姿を見て**

**じつは心配になったりもするんだ。**

**お母さん、いつも仕事しながら 家族の幸せを一番に考えて**

**私たちにめいっぴいの 愛情と笑顔を注いでくれて**

**本当にありがとう。**

**大好きな二人に一番伝えたいのは、“あまり頑張りすぎないでね”っていうこと。**

**これからの未来も幸せの度合いも 全て自分で選べるんだ。**

だからこの家族でいられる“奇跡”を思う存分楽しもうね。  
二人のことが大切だから“ありがとう”が言える距離だから  
なおさら伝えたい。私たちを生んでくれて  
愛してくれてありがとう。  
二人の子どもに生まれてきて 本当によかったです  
心から思います。  
これからもずっと 元気でいてね。 お願いだよ。

秀幸・恵美・梨恵より

この言葉を3人で声をそろえて読んでくれました。みんなで涙と笑いの賑やかな通夜をしてやりました。私の夫は、本当に家族や周りを大切にして生きてきました。私は努力をして少しでも人の思いが感じられる人間になりました。

私は、これからの人生を、夫が無言で背中を示してくれたその生き方をこれからの生きる指針として、夫の意志と共に生き、人権教育、同和教育に頑張っていきたいなと思います。今日は本当にありがとうございました。(拍手)

#### 《パネリスト C》

今日は、本当にありがとうございました。(ニコニコしながら)今日は2ついいことがありました。今日ここに来た時に、Bさんに「全国人権・同和教育研究大会の特別報告大変ですね」と言われて、「大変なんですよ」と言ったら、「頑張りすぎないでね。あなたはあなた以上でもないしあなた以下でもないから、ありのまま言えばいいのよ」みたいなことを言われて、心がスッと軽くなりました。それが、今日来てよかったことの1つです。

もう1つは、たまたま娘がこの近くの大学に来ていまして、さっき途中で帰ったんですが、話を聞いていました。自分が教員として、夜いつも遅く帰ったりとか、週末いないという状況で、どんな思いで人権学習や同和教育をしてきたのか、ちょっとでも娘に伝えられたということがよかったことです。又、盆に帰ったら話をしてみようかなと思っています。

(元気よく)とりあえず迷ったらやってみようと思っています。やってみて失敗したらまた変えればいいし。いろんな人と出会って、いろんな人の話を聞いて、そういう体験の数を増やすのが一番いいのかなと思っています。

また、12月の6日、7日「第66回全国人権・同和教育研究大会」「人権確立をめざす人づくり・組織づくり・まちづくり」の分科会が6会場、小豆島であります。大会前日の5日に、『土庄町人権フェスタ』というのをやります。もし、お時間がありましたら来ていただいて、「こんなことをしたらいいね」とか、「こんなことはいいね」とか率直な感想等いただければと思います。12月にまたお会いできることを楽しみにしております。またよろしく申し上げます。(拍手)

#### 《パネリスト D》

今日はどうもありがとうございました。うちの生徒たちも頑張っています。でも、頑張るのはあまり好きじゃないんです。どちらかというと頑張るのは苦手な方で、性に合わないんですけど、普通に頑張ってみようかなと思っています。

頑張ってみようかなということの一つに、うちわの話でこんなところで言うほどのことではないんですけど

ど、人権教育を勉強してきて、「部落差別をなくしたい」「いじめをなくしたい」とか、「あらゆる差別をなくしていきたい」とかいろいろあるんですけど、とどのつまりが、自分の家族関係をどう良くしていくかという所にたどり着いてしまうんです。

うちの親父も83歳です。(力を込めて)差別の話については相当やってきました。これは、父親だけでなく母親もそうです。ケンカをしたことや家を飛び出したこともありましたが、今、一緒に暮らしています。(しみじみと)83歳になる父親を目の前にして、どんどん弱っていく親父を目の前にして、やっぱり息子としては親父というのは大きい存在でしたよ。強い存在でした。でも、どんどん弱っていく父親を目の前にして、仲良くありたいと思うんです。同和教育・人権教育をしていて、家族の仲が悪いっておかしいじゃないですか。

夏の高校野球、鳴門渦潮高校を応援していました。負けちゃいましたけど。4番バッターはずっとこの中学生集会で育ってきた子だったんです。だから、応援していたんです。負けるまでは。どうしようと思ったんですが、親父を甲子園まで連れて行ってやろうと思いました。

今、中学生に思うのは、いい家族関係をつくって、「幸せって何？」という問題提起もしましたが、幸せな表情で帰ってほしかったんです。お父さんいない、お母さんいないってうつむいて帰ってほしくなかったんです。幸せになるんだっていう顔で帰ってほしかったんです。

それは子どもたちもそうですけど、私自身もそうなんです。ここにおいでの方の皆さんもそうですし、みんなが幸せになっていくのがこの教育だと思います。(いっぱいの笑顔で)お帰りになる時はどうぞ笑顔で帰ってほしいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

(しみじみと)できるだけ多くの方という思いの中で進行させていただきましたけど、なかなか全員が発表するようなことはできません。今日の資料に入っていますアンケート用紙にしっかりと綴っていただけたらと思います。「人権を語り合う中学生交流集会」の今年度の報告集が本当に楽しみです。

その場に何百人もの人が集まるのは無理です。だからこそ、記録で読んでいただけたらと思います。語り語りを生んでいく世界です。そんな記録を毎年冊子にまとめてきました。記録にすることを意味をやっぱり嘸みしめます。

最後に、2005年、松茂町で仕事をさせていただいた時に、「みんなで学ぼう人権問題」の冊子の編集をさせていただきました。その冊子の30頁の大好きな文章を紹介させていただいて会を閉めたいと思います。(じっくりと、一言一言を大事にしながら)

**子どもは、悠久の命を受け渡すかけがえのない存在である。**

**子どもは、無限の可能性を持つ存在である。**

**子どもは、大人によって尊敬されるべき存在である。**

**人権は、人間性の尊厳を顕わにする。**

**人権は、命を生み命を育てる。**

**人権は、美しい言葉を生み豊かな文化を創り出す。**

**人権は、人々を結びつける。**

**人権は、争いを止め世界の平和を創り出す。**

**そして、人権は人類の未来を拓く。**

まさしくこの言葉のとおりです。「人権を語り合う中学生交流集会」の思いが、このフォーラムの中に広がった時間となりました。大切なのは日常です。私たちの家族です。私たちの職場です。いろんな思いを共有しながら幸せを実感する1日1日を、共につくっていきたいと思います。以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

## 後半終了

### 《参加者の意見・感想》

◎同和教育を推進していくために最も必要なことは情熱だと思った。水平社宣言の「我々は熱や光を求めるものである」ではないが、差別をなくそう、人と関わろうとすることへの熱意をものすごく感じた。人と関わること、その人のために何かをしていくこと、自分を解放することは、とても力のいることではあるが、その分きっと充実感が大きいからこそ継続できるんだと思った。中学生集会に参加した生徒の意見がすばらしい。その思いを語れる土壌をつくっていくために、どんなことをしなければならないのかを自分なりに考えていきたいと思った。

◎教職歴は長いけれど、まだまだほとんど何も生徒に伝えられない情けない状態だと思い知らされます。日常を、一日一日を大切にしていきたいです。ありがとうございました。

◎各自、奮励努力すること。実践を身近なことから、やれることからすること。

◎中高生の言葉も感動でした。

◎それぞれの立場の大人が、大人として「自分として、何ができるか？」を真剣に考えて、中学生へ日々関わっていかねばいけなと感じました。大人が、どんどん研修を重ね、子どもたちの本音に寄り添える大人になれるように研修を重ねていかねばと思います。語る中学生はすごいパワーをもっている、人権を大人もどんどん語らなければいけなと強く思いました。

◎中学生や高校生がこんなにも自分と向き合っているんだと思うと、自分ももっと考えなければと思いました。ありがとうございました。

◎A先生、Bさん、C先生、D先生、すばらしいお話ありがとうございました。心に染み渡るようなフォーラムだったと思います。語ること、信頼と尊敬の絆をつくること、家族と仲良くすること、そして幸せになることが心に残りました。今日は来る予定だった高校生の3人が都合で参加できなくなりましたが、ケーブルテレビで放送するとのことでしたので、できれば録画して見せて話し合いたいです。私自身も明日に向かっていく勇気をいただいたフォーラムになりました。ありがとうございました。

◎辛い思いをしている人を支えるのは、周りの人たちの温かさや、その人の全てを受け入れる雰囲気だと思う。自分の家族に障がいがある人がいる子や部落出身の母をもつ子が、周りの人にそのことを伝えられたのは、きっと周囲の強い支えがあったからだと思う。パネリストの方のお話の中で「(人権問題の勉強をすることで)差別が残る」と言われたということがあったが、ふだん差別が見えなくても、自分の周りで差別が起こったとき、辛い思いをしている人を支えるためにも、「それはいけないことだ」とはっきり言うためにも人権教育は必要だと思う。

◎中学生が自分の思いを大勢の前で発言することは、とても緊張したと思う。私が、中学生の頃、そして、現在もできないことである。「自分で決める幸せ」を胸に日々考えながら生活していきたいと感じた。ありがとうございました。

◎学級づくりをする上で、“本音で語り合える場をつくるのが、いじめや差別をなくす一歩につながる”こんな学級、雰囲気がつくれる一緒に共感できる教師になりたいと思った。

◎A先生が発表しようと思うと胸がドキドキし、マイクを握ると頭が真っ白になる中で、思いをしばり出すように発表するんだと言われましたが、まさにその通りで、聴く時もドキドキしながら聞いています。勇気を出して自分を語る事ができた時は、帰る途中、とても清々しい気持ちになれるが、発言の機会がなかった時は、不消化で、何か忘れ物をしたような気持ちになります。しかし、やっぱり人前で語ることは、とても苦手です。でも、必ず情熱は持ち帰り、周りに発信するようにしています。今日もいっぱいエネルギーをいただいて帰れます。

◎それについて考えてみる、思いを馳せることから始めたい。それが人権を考える、大切にすることにつながると思います。そして、一番身近な存在である家族を大切にすることが人権を考えることの一步。

◎今日はありがとうございました。初めて参加しました。なかなか手をあげられなかったです。でも中学生がこんなに堂々と発表しているのを見て自分が情けないなあと思いました。自分の今の悩みなど、これからこういう場で手をあげて語れたらいいなあと思うので、来年も参加したいと思います。

◎学校教育が中心でしたが、社会教育までひろげてほしかった。

◎いつも思うことですが、中学生や高校生(若い人達)の意見が聞けることがありがたい。作文等、文字でなく、生の言葉で感じる事が出来て、心に沁みていくものがある。

高校生…大人に期待している。これに応えたいものだ。

中学生…仲間を広げようとしている。

◎現在、教員(小学校)をしています。人権教育をしていると、どうしても「ひとごと」で終わってしまいがちで、どうすればいいか悩むところです。今日このフォーラムに参加して、先生方の取り組みや、テーマでもある「ひとごと」から「わがこと」にしていくために、今、目の前にいる子どもたちにしっかり目をむけ、取り組んでいきたいと感じました。また、今日伝えてくれた中学生、高校生の語りがとても心に響きました。とてもパワーをもらいました。素敵なフォーラムに参加できてよかったです。ありがとうございました。

◎マイクの持ち方がよくないのかあまり聞こえませんでした。

◎3人のパネラーの方、本当にありがとうございました。A先生のコーディネートがより人権フォーラムを素晴らしいものにして頂きました。言葉の一つ一つが心に落ち、温かくやわらかくひろがっています。

◎パネリストのお話も心に響くものがありました。A先生の一言一言にも感動し、メモしました。人権学習にかかわってまだ数年なのですが、自分の考えが変わっていくことを実感しています。いつも心の中に みんな一人一人大切な人というのがあります。今日は本当にありがとうございました。

◎中学生集会(語り)の雰囲気が、実際に中学生や他の人の発言を聞きながら感じる事ができた。だれもが伝えたい思いをもっている。それを外に出すことができる場・人という環境があるということは大切だと思った。伝えることができる人って、生き生きして、とても輝いて見えました。

◎すごく感動しました。私は結婚して部落になったので、あまり人権について考えた事ありませんでした。今後、子どもが産まれたら、人権について一緒に考えていきたいと思いました。今日は、来て良かったと思います。

◎言葉ってすごく大切だと思う。一度口に出してしまうと取り消すことなんてできないし、一生残る傷になる場合だってある。社会人になって、人権について考える機会なんてなかなかないので、今回参加して、自分を見つめ直す、人権について考えるきっかけになりました。語っていくためにも、自分で知っていく、理解していくことが大事だと思った。もっともっと人権差別について一つでも知って語っていく勉強していこうと思った。また、こんな集会があつたら参加したいと思った。参加できて良かった。

◎毎年続けていることが、確かな一步につながっていくと思われます。今後も、しっかり前を向いていきましょう。今回、初めての参加ですが、参加者の思いがあつて伝わってきました。来年も参加したいです。

◎私は、今回初めて参加させていただきました。3名のパネリストの方々の話が具体的で、何とも言えない気持ちになりました。差別の現実を知って、どんな思いを持ってその差別に向き合っているのかなどのお話を聞きながら、自分は、どう向き合ってきたのか、どうこれから向き合っていくのか、まだまだ頭の中はまとまってはいませんが、確かに言えることは、自分の中で大きな学びと収穫があったことです。会場にたくさんの学生さんも参加されていたこともよかったですと思いました。

◎さまざまな立場の方がパネリストとして参加していたので、多くの人たちとつながることができる会だと思う。A先生は、全体集会で司会をされていたので、うまく、コーディネートして、言葉と心をつないでおられた。非常に勉強になりました。中学生も、交流会で力をつけて、こんなに自分を語れるようになるんだと思った。日常を大切にしていきたいと思う。ありがとうございました。

◎パネリストの方や中学生の想いを聴いて本当に考えさせられるとともに元気が出ました。ありがとうございました。次は、中学生集会に参加してみたいと思いました。

◎このフォーラムに参加してBさん、Cさん、Dさんのはなしをきいていると、Bさんは小5の時にいろいろあったことをきいていてかなしくなりました。Cさんは宿泊を通して、親子での人権を語り合ったりすることはいいことなんだなあと思いました。D先生の話は、私が参加していた人権集会のことを話していました。私はその集会に参加しようと思った理由は、発表することが好きだからです。なので、私はA先生に自ら参加させていただきますと言って参加しました。そうすると自分が言いたいことをたくさん言えました。その中でも言えてよかったと思うことが2つあります。1つ目は弟のことです。私の弟は、ダウン症という障がいを持っています。私はそのことをずっと隠し続けました。弟のことは大好きです。でも人に言うのが怖かったのです。嫌だったのです。でも、この集会に参加したら言いたいことが言えたのでよかったです。2つ目は家族のことです。私は昨年、母が出ていきました。でもあるきっかけで母と一緒に暮らすことになりました。その理由は父です。私は父が嫌で出ていきました。そのことを話すと、みんなはたくさん意見を出してくれました。言えてスッキリすることができました。私はもっと人権を知り、いろんな人にもっと伝えていきたいです。

◎私は、初めてこの会に参加し、話を聴き、こんなに部落差別をなくすために動いている人がたくさんいるんだと感じました。今回は大人の人の話を聞いてみたいという思いで参加し、大人ならではの悩みがあることや、子どものパワーというのが聞いてよかったです。最後の方でA先生が語った。「生まれた場所を変えることはできないけど、人生は変えることができる」という言葉が心に残りました。

◎自分も手を挙げて意見を言いたかったと思いました。それだけ、この時間は心を揺さぶられ、言葉一つ一つに響くものがありました。コーディネーター、パネリストの先生方の思いがすごく伝わり、中学生の皆さんの言葉に勇気ももらいました。我々大人が(中学生たち)子どもたちの思いや願いのために、ちょっと頑張らなければと思います。このような会に参加でき、幸せです。

◎私は鳴門市ではありませんが、小学校教員をしています。自分も同和問題などに「ひとごと」になっていたもので、初めて6年生を担当したとき、部落差別を教えられないことがありました。その時、先輩の先生が「それはおかしい」と指摘してくださり、自分の中に差別する心があったのかとはずかしくなり、今勉強をしているところです。まだまだですが、とにかくやってみる気持ちで、少しずつ自分にできることをやっていきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。フォーラムに参加して涙が溢れました。

◎中学生の皆さんが、自分の思いを一生懸命に語る姿が印象的でした。A先生やD先生と子どもたちのつながりの深さも感じとれました。そのような人間関係をつくっていったらと思いました。

◎若い人が増えてきているなあと感じた。3回目の参加でしたが、毎回新鮮な気持ちになって会場をあとにすることができます。ありがとうございました。

◎中学生が必死に自分の思いを伝えようとしている姿がとても心に残った。このような思いが語れる中学生を育てるといふか、中学生がこのような思い、語りたい、人とつながりたいと思うようになるためにはどうすればいいのか？2学期からの学校生活でこういう場や活動をつくっていくことが大切だと思った。本当にありがとうございました。

◎他県や他町より毎年同じようなメンバーを招き、この会が行われている。内容的には、いいと思うし、本市の人権についての研修会は、同和問題に視点をあてたものは、少ない。以前、20年位前の本市はそうではなかった。やはり、法失効後、部ぬき、差ぬきの人権教育となっている。

本市の中・高生の実態はどうだろう？本市の中・高生、先生方を交えた会が必要と思う。また、本会は、本市が、会場を提供し、お世話をしているだけなのかと思う。A先生のグループの会のような気がするのだが…。

◎大人の人の意見もきくことができるととてもいい経験になりました。

◎中学生集会にたずさわってきて年々感じるのは、「つながる」ことのできない子どもたちへの思いです。今年も、担任していた子から、部落差別の相談をうけました。つきあっている彼女の親から反対されている、というものでした。相談してくれたからよかったものの、もしつながりがなかったらと考えてしまいます。今、つれてきている子は、実は担任のクラスではなく、他学年、他クラスの生徒たちで、そういう手段としての集会の役割もあると思います。鳴門の人権フォーラムも、そういう場としてこれからもあり続けてください。

◎私は、この度初めて「人権地域フォーラム」に参加させていただきました。初めて、参加して、驚いたのは、私がいつも参加していた「中学生集会」とは少しちがって、多くの大人の人が参加して、意見交換をしていくという点です。その中でも一番印象に残っているのは、D先生の言葉で「親がいないから、不幸せなのか。弟がダウン症だから不幸せなのか」という疑問提起です。私はこの言葉を聞いた時、ハッとしました。理由は、私は、最近まで、自分は不幸せだと思っていたからです。しかし、他の人の話を聞くと、親がいない人や、弟が障がいを持っているということを知ると、自分は何を考えていたのだろうと改めて考えました。親は、木であり、子は地であるとはよく聞きますが、まさにそうであると思います。親の支えがあって今の私があります。今日のフォーラムで改めて考えました。ありがとうございました！

◎高校生になって自らの意志で、たくさんの集会に参加しました。やっぱり、マイクを持つと頭が真っ白になりました。でも、言ってスッキリしました。高校生は、大人にも子どもにもなる不思議な時です。気持ちが揺れ動く時期ですが、考えを広げる大切な時期だと思います。大人達が集まるこのフォーラムは、自身の成長の為に生かしていける集会だと思うのでこれからも参加していきたいです。

◎同和問題の他にも国の差別や障がい者のいじめなど、正すべき色々な差別が身近にあることがわかり、そのことをもっと知って少しでもそれを無くすことができるようにこれからも人権活動に積極的に参加していこうと思った。

◎講師の皆さま 御苦労さまです。本音で語り合う習慣のない日本人に、その様な場を作るという事は大切であり、これからの日本人に求められる力であると思います。これからもフォーラムや交流会などを続けてください。

◎中学生の素敵な思い、みんなの前で語る勇気に感心しました。私自身ももっともっと勉強して、おかしいことはおかしいと気づく、あたりまえの気持ちをもっていきたいと思います。

◎また来年も参加したいと思います。おつかれ様でした。

◎本日はありがとうございました。

◎人権啓発にボランティアで頑張ります

◎中学生の本音の言葉、ここで聞かせてもらっただけでも熱くなるものがありました。また、本当に人権問題に取り組んでいる人達のいることも知りました。今日のテーマ「ひとごと」→「わがこと」へと考えられるのはなかなか大変と思いますが、この中学生達の声聞かせてもらい勉強いたします。中学生集会の記録とP・Mを読ませていただきます。

◎まずは、一生懸命自分のことを語る中高生に驚きました。私は、このような会に出てもいつも聞くだけで終わらせていました。こんな自分が恥ずかしい思いと、自分も言ってみたいなと思わせていただく機会となりました。なぜ人権教育が必要か、差別がいけないことは誰しもがわかっているものの差別がある事実。人間の性なのか…、自分が優位に立ちたいのか、恥ずかしながら、私の中にも、うまく言葉には言えませんがもやもやと差別心があるのだらうと感じます。今日のように真剣にもっと語り合えるならば解消していくのだらうと、勇気をいただきました。が、まだ私には一步一步というようにゆっくりと。

◎小さな事が幸せだと分かった。

◎子どもたちの本気の言葉を聞き、教室で子どもたちの心を開放していけるような毎日をつくれるよう頑張っていきたいと、心から思った。ありがとうございました。

◎若い子がどんどん自分の考えを発表できていたのがすごい。自分の生き方をしっかりと見つめられていてすばらしい。私たちも負けていけない。

◎様々なところで、様々な人たちが、真摯に生きている。そんな輪が、広がっていくことを願っているし、そんな自分でありたい。

◎家族っていいですね。

◎Bさんは抽象的で心情論に終始していた。差別の現実には学ぶ基本をどの場面でも基本としてもらいたい。他のお2人の話は、いろいろ考えさせられました。中学生や高校生、立派だと思う。なかなかこんな生徒にはなれない現実に少しため息が出るが、明日にまたがんばるしかない。

◎A先生・D先生の教え子です。20数年ぶりに先生の話をお聞きしました。来て良かったです。

うまく言えませんが、自分を見つめ直す時間でした。ありがとうございました。

◎私は行政職に就いている者ですが、夏にここで勉強させていただくことを楽しみにしています。自分自身の迷いに対して、勇気と気力をいただきました。

◎途中で帰らないといけないのが残念です。たくさんのお話を聞かされたお話でした。

◎私は自分の意見を言ったり、大勢の人に向かって発表することが苦手で、することもする機会もまあないだらうと思っていました。でも担任の先生に「行ってみんか」と言われて、せっかく機会ももらえたから行ってみようと思って来ました。中学生の意見交流会で、まず思ったのは、みんな堂々と発表できてスゴいなあということです。そして、ただ聞いているだけでは、言った人に申し訳ないというか、自分も発表しなきゃいけないなあと思って、「頑張って」発表しました。でも、今日Sさんの発表を聞いて「頑張って」じゃダメなんだなと思いました。今度は「自然」に発表できるようになりたいです。

◎今回、初めてたくさんの方々の前で意見(思ったこと)をしゃべらせていただきましたが、中学生の前でしゃべるのとまたちがって、頭が真っ白になるくらい緊張しました。でも、上手く伝えることができたかどうかは分かりませんが、思いをしゃべることができて本当に良かったです。このような機会をくれてありがとうございました。それと、来年も参加したいと思いました。もっとたくさんの方の考えを聞いてみたいです。それに、もっとたくさん時間があつたらいいのにな、と思いました。とても時間が短く感じました。